

賤賤なからしむるためだ」

「しかし良人、外の事と違つて、さういふ事は考へものですよ、たゞ良人ばかりの料簡で無理に、吉田さんを此方へ引取るやうな事をなすつちやア、却つて、よくありませんよ、たとひ出来て居ないにしろ、はや既に二三度、ちよいと往つて見た良人の眼にさへ餘るほどの、妙な工合があればこそでせう、第一それに本人と本人との心が、どう通つてるか、どんな約束あるか知れもしないものを、また吉田さんは元來あゝいふ萬事おとなしい人ですから、兄のやうに思つてる良人の一言で、來いといへば否とは言ひなさいますまいが、そりやア良人、猶よく考へた上で」

「大丈夫、吉田に於て其、そんな心の通つたり約束のあるやうな筈が無い、ありやア和女、根が都人士の夢にも想像し得ない山家生育で、里の艱難から直ちに學校へ飛び込み前後六年を通じて、數千人中より優等第一を占めて出て男だ、加之も浮世の風塵に

深く接しないが、外貌によらない案外の鯁骨で意志の強堅なる態度の慎重なる前途希望の遠大なる、なか／＼今あの境遇で女色を顧みるやうな違も無し人間でも無いよ、そりやア大丈夫だがね、わざ／＼その大丈夫を守らするよりは寧ろ、その大丈夫の必要さらに無い乃公の家へ引取る方が彼のため宜からう、どうだ、また實は其家の娘といふ女、甚だ凡に超えて人を動かすに足るの美形でね、さらに其また母親といふ女が四十後家の頗る世辭の宜いのみか、どうやら母子もろとも一方ならず吉田を歓迎し過ぎてるやうだ、これ大に不可ンぢやアないか、色よりも戀よりも義理人情といふ世に恐るべき大盤石に身を押し入れて動けぬやうな結果があつては、吉田のため實に歎すべきことつた、全體かういふ事を今さら言ひ出しちやア濟まないがね、そも／＼汐入村の同志いづれも妻なるものゝ一點に於ては、よほど身に過ぎた幸福のあるやうだが、却つて聊か其理と其常に叶はないところがあるぞ、第一まづ川上

が濱町の戀壻となつたのも宿志いまだ達せざる半途で、只その情に搦まれ其縁に結び付けられた不自然の形跡なきにしもあらずだ、また倉橋が時の大臣に見込まれて其娘と約束したのも、彼が性質としては慥に人知れぬ何等かの好まざるところを海外一躍の犠牲に供したらしい、かの黒田の如きに至っては別して論外の沙汰だ、現在さらに乃公と和女の間も亦これ一種、いはゞ妙な工合から變に出来上つた奇縁で、この馬鹿亭主を守ることに斯の如き良妻の和女は殆ど乃公に取つての拾ひものだ掘出物だ、はッはッはッはッ其年の南瓜うまく幸ひに當つて、野郎さらに恐悦至極の體、だが、さて五人のうちで四人の最後に残つた一人の吉田雄藏、願はくは業成り志遂けて人道の上より一家の上より實際正當に妻といふものゝ必要が起つた時、その正當なる必要に應じて加之も更に一點の過不及なき妻を迎へさせたいよ、わるくいへば以上の四人いづれも時いまだ來らざるに迎へた變則だ、たゞ變則としては皆こ

れ後期よりも案外に出来の善かつたのだ、もし萬一どんなに悪くつても不足のいへない奴等だ、ね、だから吉田を今のうち、たとひ多少の無理があつても強ひて彼家を引出さうとするのさ」

「おやまア、吉田さんの事から大變、いろんな小耳の痛い事はかり聞かされましたね、しかし良人、夢にも、戲談にも、いくら心易い打解けた間でも、そんな事を口へ出しちやア、不可ませンよ、叩き出されたつて蹴り出されたつて行きどころの無い妾のやうなものは格別、ほゝゝ意地から喰ひ付いて動きませンがね、お生家が善くつて、御容貌が美しくつて、萬事當世仕込に伶俐な女は、自然どツか奥底に氣の強いところが、ありますからね」

「無論よ、乃公だつて和女だから話すのさ、時に吉田の事、宜いかね、その決心で引取るんだから」

「そりやア良人、そこまで良人、さういふ御料簡でなさる事なら、妾に何の、兎や角あるもンですか」

「ちやア明日、此方から迎ひに出掛けてやらう、だが定めし恨むだらうなア、あの母子が乃公を」

「どうせ良人、先方の覘ツてる的を横合から不意に取り外すンですもの、あまり嬉しく思やアしませんよ、しかし其事が吉田さんの身の爲になるといふ御料簡なら、いたし方ないぢやアありませんか」

「そこだ、如何にも大信は却ツて信ならざるが如し、だしぬけに飛び込んで、否應なしに吉田の荷物を擔ぎ出してやらう」

「ほゝゝゝまるで晝盜賊ですなエ」

「なアに相手が女だから面倒だ、實ア和女にこそ斯う饒舌るがね、ぐづく他の女郎

に取ツ捕まツちやア頗る談判が下手だよ」

「下手で僥倖、もし良人その好男子で上手だツたら、うかく一人で外へ出せませんもの」

「ふざけるな此奴、はッはッはッはッはッ」

其五

高が一閑張の机一脚に粗末の筆硯文具、わづか上下三枚の木綿夜具、洗ひ酒しの着替を押し込めし柳行李一個、積んで山の如きも既に彼が腦裡に消化し去りし讀殻の書籍幾冊、以上これを一括して屑屋の量目どれほどの價あるべき、たゞ多年の苦學慘澹中より砂金を拾ひ集めし如き筆記ものと本人の身體さへ持ち出せば其他に用なしと、生捕を取返すに等しき上田力、夜の明けけるや否、我家を飛び出しぬ、

如何に見ても當世の産物にはあるまじき容貌態度、道幅狭き團子坂を暮の歩むが如く上りて、やうく千駄木の屋根瓦に日影の射す頃、はや林町の例の門口より例の破鐘聲、吉田ア居りますかいと響き渡りぬ、

「おや上田さん、まア貴方お早くから、さア此方へ、どうか直接お二階へ、これお春や、上田さんが入らしつたよ」

第一この世辭愛敬が氣に喰はぬ、また何處へ行くとも斯うは持てぬ筈の乃公の名を斯う馴れ馴れしう、加之も用なき娘の名まで呼んで手を取らんばかりの追従が猶更ら以て面白からずと、上田そのまゝ、輕き無言の會釋を残して二階へ上れば、吉田の姿なくて本敵お春が我物顔に机の邊を擽がけの拭き掃除、眞白き手先に雑巾を持ち添へながら微笑を浮べて慇懃の體、名筆の浮世繪より脱け出でたるが如し、や、此女いよく油斷がならぬわい、

折しも上り来る登音、吉田かと思ひの外の母親、はや茶盆に菓子添へての待遇振、そツと振り返りつゝ、

「まだ和女お掃除をして居たの、ぐづくとさ、もう宜いから階下へ降りて外の事を、ほんとに上田さん、あの通りの小兒ですから困りますよ、ほゝゝゝ」

何が彼女、小兒なもんか、おそろしい小兒ぢやわいと、上田おもはず腹の底に冷笑ひながら、

「吉田め、何をして居るんです、怪しからん奴だ、自分の居室を他人に掃除さすなんて」

「いゝえ貴君、わざと修行のため、娘に、さして戴きますので」

「そりや兎も角も、吉田ア」

「吉田さんは今朝、餘程お早く出られまして」

「不在ですか、全體どこへ行きましたか、む、最早出たんですか」
 南無三寶、さア仕舞った、どうやら我も生捕られたる心地して、餘所の女郎には頗る
 談判の下手を自白せし前夜の前兆、そろく今こゝに頗る下手な談判へ引ツかゝりさ
 うなり、

「上田さん、まだ二三度お目にかゝりましたばかりで、かやうな事を申し上げては、
 甚だ出過ぎた女と思召しませうが、かねく吉田さんから承ツて居ります事も御
 坐いますし、それに女といふものは御承知の通り、じつと胸に持つて居る事が出来ま
 せんので、ついね、はゝゝゝ外でも御坐いませんが前夜、あの吉田さんが唐突に
 急に手前方を出ると仰しやいますの、勿論、萬事かやうな不行届で、どうせ御氣に
 召さない事ばかりですから、都合で外へ行くと仰しやれば、致し方も御坐いません
 が、その御都合が貴方、ほゝゝゝそして上田さん、どこへ往らッしやるかと思へば

貴君の御家ださうで御坐いますね」

そら來たと覺悟しながらも、はや既に二階へ押し上げられて遁け場を失ひし今更、こ
 のまゝ例の筆記ものだけ抱へて飛び出しもならねば、手持無沙汰の兩腕を組んで山の
 如き肩に太き首骨を埋めつゝ、

「や、さうです、實ア僕の家へ、いろく深切に世話をして下すつたさうだが、彼も
 少々、いつまで悠々と暢氣な境遇に置けない理由があつてね、これでも兄分の僕が
 兎も角、引取るといふ次第です」

「ださうで御坐いますね、しかし上田さん、手前方こそ母子とも此通りの惘然で居り
 ますが、あの吉田さんは貴君、なかゝそんな悠々とした暢氣では在らッしやいま
 せんよ、朝は人の目の覺めないうちから、また夜は一時が二時までも、よくまア、
 あれで御身體の續くこつたと、をりくは入らぬ差出口と存じながらも、ついねエ

貴方、御諫言するほどの御勉強で御坐いますよ、また此ま、居れないといふ理由も失禮ながら、ちよいと、お聞き申さないでも御坐いませんが、決して貴方、さやうな御心配なく、折角こゝまで打解けて御馴染になつたんですもの、もし手前の勝手を申せば他人のやうに思召さず、此後は猶更の事、何卒いつまでも相變らず願ひたいんで御坐いますよ、何も貴方、さう俄に水臭い事を仰しやらなくツても、ほゝゝゝ、まだ良人が居りまする節、どうか斯うか其日を過すだけの用意は致してくれましたから、ほゝゝ、御安心あそばして、また行々は、どんな事で上田さん、貴君へ御無理を願ひますかも知れません、母子で御坐いますから」

吉田が言葉に窮して貧乏の一點張を張り損ねし其失敗を知らねば、真正面より不意に饒舌り立てられて上田いよゝゝ前後の煙に捲かれし體、されど行々この我へ母子が無理を願ひに出るとは正しく其事、もはや奥の院の扉は會釋もなく開けたり、第一あの

娘が今朝この机邊を我物貌の小面といひ、さては油断大敵また既に顔前へ押し寄せたりと、さらぬも大の眼球ぐるぐると丸くして夜着の袖口に似たる唇端を反り返しぬ、
「兎も角も今朝、吉田ア何處へ行くと言つて出ました、いつごろ歸るとか、何とか言はなかつたですか」

「はい、どこへとも仰しやいませんが、五時、ちよいと過ぎたばかりでしたらう、事によると上田さん、貴君の御家では御坐いますまいか」

「なるほど、や、さうかも知れん、ぢやア此ま、歸りますから、もし行き違ひに戻つたら、すぐ其足で引ッ返して来いと言つて下さい」

「しかし兩方から貴君、そんな空足をなさらいでも其うち、お歸りになりますよ、もう暫時」

「なアに必要なためには幾何、空足を踏ましても宜いです、自分のこツてすからは是非

「すぐ来いと言ッて下さい。」

「お傳へ申しますが、そんなにも何も貴君、實は吉田さんの事に就いて猶、よく伺ッて置きたい事も御坐いますから、御迷惑でせうが上田さん。」

「いや、今日は少し外に急な用もありますから、また改めて聞きますせう。」

「だッて御止め申す理由ぢやア御坐いませんが。」

「時間ぎれの用です。」

「まア貴君。」

「失敬ッ。」

本人の吉田も居らぬに我た一人、この浮世馴れた口八丁の四十後家を相手に、うかうか長居して堪るものかと、かゝる事には案外の弱蟲、袖を拂ふが如く座を起ッて、遁け出す如く二階の降口へ掛けし片脚、つるりと二ッて踏み外すや否、とめ途なき二

十貫の大兵肥満、どたんばたんと脊骨を打ちながら床板まで突き抜く勢ひに顛け行きし下より、今しも昇らんとせし娘のお春が不運、左右の壁に飛び退く違もあらばこそ、あはれ盤石に押し潰さるゝが如き悲鳴、きやツと叫びぬ、

夜更けて後、面壁の定坐より追ひ出されし達磨の如く、たゞ惘として我家に歸り來りし上田力、何は儲置き、まづ第一に坊は寢たかと差覗く例の調子も無く、針の手を止めて迎へし妻の愛敬にも眼をくれず、ランプの灯影に反いて火鉢の横に自己が身を抛ぐるが如く、どツと坐したるまゝに總身の大意、ほツと吐きぬ、

「おや良人、どうかなさいましたの。」

いへども兩腕を組んだるまゝの無言、

「大變お顔の色が悪いぢやアありませんか。」

さけども猶そのまゝに差俯いての無言、

「あれ、をかしい事、變です、何か御心配でも出来ましたの」

始めて我に返るが如く、やうく垂れし頭をあけ組みし腕を解きながら、おもはず大胡坐の膝を直して珍らしからぬ妻の顔、じつと見詰めぬ、

「ねえおい、何故この乃公は斯んな奴に出来たらう、今日ばかりは平生の馬鹿の故でもなかつたが、とんでもない事をして仕舞つたよ」

身に浴びずとも少しは浮世の塵に染みて、たとひ諂はずとも人を外さぬ世辭さへあれば、どこに恥づかしからぬ男ながら、元來うまれついでの本調子、あまりの潔白さに却つて世間よりは後れ勝の良人、わけて我身の連添ひし後は、氣の毒や猶更ら妻子に心を引かされて自然に氣も弱りし人と、平生より口にこそ言はね萬事を身一個に掻き集めたる世話女房、わざと落着いて驚く顔色も無く、靜に番茶を汲み出しながら、

「全體、どんな事が出来ましたの」

頑たる巖組に等しき五體いよく悄然として、大胡坐のまゝ舟漕ぐ如く臀を摺り寄せぬ、

「今朝、あの林町へ出掛けてね、何の氣なしに二階へ上つて見ると吉田が不在さ、加之も其家の後家めに取ッ捕まツて、おひく面倒な談話になつて來たから、こいつア叶はないと慌て、遁け出した拍子に和女、階子段を踏み外してね」

「あれ、まア良人、小兒ぢやアあるまいし、氣をお付けなさいよ、みツともない他家の家でさ、しかしお怪我も無くツて」

「なアに乃公の怪我ぐるんで濟めば結構、お目出たい理由だが、運わるく其家の娘が結局それがため吉田を出さうといふ其、その娘が和女、二階へ上りかけた頭の上へ此でツかい身體が落ちたから堪らない、きやツと言つたまゝ氣絶して仕舞つたよ」

「おやツ、まア大變な事をなさいましたねエ」

「折から吉田が歸ッて来て、飛び込むや否すぐさま醫者へ飛び出す、二階からは狂氣のやうに母親が駆け降りて泣くやら叫ぶやら、乃公も一時は殺したかと思ツて」

「どうなりました良人、それから」

「ところが僥倖、やうく息を吹ツ返してね、しかし立てない、どうしても立てない、醫者が來ての言葉には、可愛さうな事をしたよ、左の足首を挫いて骨が少々」

「もし良人、跛躓にでもなりやアしませんか」

「さア、そこだ、うまく癒れば宜いが、事に依ると、さうかも知れないと聞いたから吉田と母親が付き添ッて小石川の病院へ遣ッたもの、和女、その間この乃公が一人で留守番をさせられて居た辛さア、けふ一日で實に瘦せるやうな氣がしたよ、加之も吉田が午後、病院から歸ッて来てね、母子とも決して貴君を怨ンでるやうな口氣も

ないから安心なさいと言ツたが、こりやア乃公を慰める一時の辯でも無い、その一言は正しく吉田の心中に乃公の失策を脊負ひ込ンで何等か大に期するところあツたらしい様子だ、嗚呼こゝまで前途圓滿の妻を希うて吉田のために苦心した乃公は、寧ろ却ッて吉田をして跛躓の鼻アを持たすかも知れないわい、咄々この魯鈍め、いやはや雙方へ濟まない事をして退けた、これに懲りて以後一切、もう生意氣な口も出すまい、や、他事どころか參へて見ると自己が一身すら斯く出来損ツた不完全の乃公だ、しかし残念な事をしたよ、汐入村以來の五人中、第一の完全を望んだ、あの吉田に今さら不具の鼻アを持たさうとは、夢にも思はなかつたが、人事意外こゝに至れりだ、あゝ不可ン、不可ン」

「しかし良人、此方の勝手をいふやうですが、つまり思ひも寄らない不意の災難で、どうせ出来た事は出来た事として、まづ仕方が無いと諦めて貰ツてさ、もしそれが

ために母子の念が届けば良人、それこそ却って不幸の中の幸福とでもいへる理由でせう、たゞ吉田さんに對しては、實に申譯も無い事で、萬々お氣の毒ですが、これも亦かういふ自然の成行で、所詮かうなる縁と思つて戴いた上、そこは妾が良人になり代つて生涯、するだけのお世話は勿論、どこまでも謝りますよ」

「どうか、さうしてくれ、ね、さうでもして貰はないと乃公の立つ瀬が無い」

「だがね良人、あまり身體の重い故か脚下の工合か、よく良人ア二階から踏み外して落ちる方ですよ、覺えて在らつしやるでせう、まだ妾が濱町の御厄介になつて居た時、そら、あの二階から唐突に妾の脊骨へ、ほ、ほ、ほ、落ち人も落ち人ですが、また受け人も受け人ですから、やうく一週間ほど寝ただけで無事に濟みましたが、もし妾が今お談話の娘のやうに容姿の美しい優形なもんなら、やはり同じ跛躄か首曲りですよ、いくら氣の毒でも可哀さうでも、この出来ない妾が不具となりやア少々

遁足でせう、ほ、ほ、ほ、」

「は、ほ、ほ、ほ、いや、昔も今も笑ツちやア濟まないが、はッはッはッはッ」

其六

宵闇の犬の糞は踏ますとも朝ほらけの狼の糞に踏みこむほどの山また山の奥に育ちながら、十四の年まで生爪一枚も剥がさず、里とはいへど猫の額に等しき佐伯の町に素丁穉の如く三年の日夜を追ひ使はれながら其艱難中に一度の風邪さへ引かず、この東京に來りてよりも一日の安居なく汐入村の寒暑飢餓と戦ひつゝ六年の學窓に苦心慘澹の頭を埋めながら、由來これほど粗末に扱ひし身體髪膚いまだ曾て兎の毛の過誤も無かりし無事息災の吉田雄藏が、そもく始めて世に出づべき二十六の曉、あの額に無頼の惡漢めいたる三寸の切疵を現はせしは誰がためぞ、

人間の五體いづれに無用の皮膚は無けれど、わけて人事一切を主宰すべき靈妙の頭腦あるところ、加之も萬人の眼に峙つべき男の額口を、自然の怪我で無く木石に破られし痕で無く一見その銳利なる刃物をもて何物にか真正面より切り付けられし疵とすれば、これがため可憐ら生涯の人格いかに關すべきや、この死に至るまで拭ふべからざる一點不祥の痕跡ありくと無慙にも吉田雄藏が如き前途有望なる謹慎自重の人にあらんとは、

されど敵は闇中に物を探るが如く、また利害の數を顧みて人にも得いはず、たゞ事の起因となりし春の名花一輪この吉田雄藏が宿とせる天井板一枚の下に咲いて猶更ら其後の色香いよく深きを思へば、外面に現はるゝ三寸の斬疵よりも、人生の行路さらに恐るべきもの、その痕跡なくして總身の皮肉に深く喰ひ入るべき大疵ありと、奮勵一番、將に去らんとせしが惡戯なる運命の神どこまで人を弄ぶか、その名花また吉田

雄藏がために心を盡せし知己刎頸の過失に踏み潰されて、あはれ描ける如き十七の美人を不具となしぬ、

小鳥の羽翼を縮めて葉蔭に棲むが如く、頼む良人を失うて渡る浮世に力草なき後家の身が、過ぎし形見に残る十三の男の子たゞ一人の外、わけて女親の心には掌中の珠玉と育てし十七の娘、加之も路傍ゆく人の歩さへ止むべきほどの娘を、如何に思はぬ不意の災禍とはいへ、現在の母が見る眼前で不具にして退けんとは、名筆の浮世繪より脱け出でたるが如き美貌も、あはれや歩むに空白を踏むが如き身となりては白玉の一片を缺きし名物の廢りもの、いづこに元の色香あるべき、そもく、誰がための涙に拾はるべきか、

二十六の曉まで完全無缺の吉田雄藏が面上に拭ふべからざる三寸の疵と、十七の年まで圓滿無垢の處女お春が左の足を損ねし生涯の不具と、その軽重いづれにかある、もし此疵のため彼は一入さらに堪へ難き思ひの露を運び、彼が不具となりしたため一旦その家を去らんとせし吉田雄藏に捨て難き心の情ありて、雙方こゝに何の罪も報いも無き夫婦となるの縁あらば、この謹直なる青年の人格を損ぜず此あはれなる花の色香も散らさず濟むべきに、うろく何處を狼狽へまはりし月下氷人の手脱りぞ、

吉田雄藏は三寸の疵に五尺の身を縮めて生涯の打算上、もし彼を妻とすれば如何なる良人となるべき、彼お春は花の如き身に一脚を損ねて生涯の運命上、もし吉田雄藏を良人とすれば如何なる妻となるべき、

戀に縁あるを眞實とすれば、竟に添ひ遂ぐべき良人の疵と妻の不具は戀の神の賜物にあらすして、正しく互に其縁を購ひし生涯の代價となるべく、たゞ價值の高きか廉きかは白髪の後の人知れぬ笑ひ草、過ぎし昔の草枕に結びし旅路の夢ともならんか、

其七

うき世を蟹の横這ひに這ひ歩いて自己は猿の手の尻に及ばぬ奴といはれながら、何を吐すぞ蜂は逆倒に家を構へて棲み屏風は曲つて立つとの減らず口、あはれ汐入村の苦學艱難中より彼奴が出たかと歎けば、木偶人を並べた五個の中より生きた奴が一疋飛び出したりと答へて、淫賣宿の亭主と罵られても平氣の面に懷手の鼻唄三昧、されど黒田健次また何處やらに人知れぬ案外の急所ありて、をりくその急所に事物の感觸する時は蟹でも猿でも淫賣宿の亭主でも無く、流石に苦學十年の曉より今かく

の境遇に落ち込みし男、はつと寤恍面に水を注ぐが如く、俄に白癡が物を思ひ出せしが如く、忽然として飛び出し飄然として懐しき舊交の門を叩きぬ、

その懐しき中にも、上田は自然の情に餘ありて處世の理に足らざるのみか、動もすれば時代おくれの友誼熱誠、お情過ぎて鐵拳の恐れあり、倉橋は事物の理に餘ありて懇篤の情に足らざるのみか、動もすれば我を厄病神の如く敬遠策に追ひ拂ふべき奴、加之も今は去つて海外にあり、吉田は近來やうくペンキ塗の學校を這ひ出して風塵いまだ一步の足跡を印せざる青い奴、この苦勞人の相手にならずと數へ來れば、人生そもく幾何の面白き友やある、今なほ眼に浮ぶ汐入村の破床に互の空腹を抱き合せて骨肉の如く交はりしものさへ、以上三人を除いて聊か語るに足るべきは只それ一人の川上三吉あるのみ、元來の性は違へど由來の論に合はねど現在の境遇は同じからねど、わけて言語態度の傲慢は癩に觸れど、また其間に圓轉滑脱として牛の角も折らず馬の

蹄も割らず、加之も清濁を呑み込んで快よく談笑する體、此奴の外になしと、平生は其處に居るかともいはざる男、俄に自己が勝手の方角へ氣紛れの足を向け出しぬ、臥龍梅の春、萩寺の秋、龜井戸の天神、柳島の妙見、それさへ本所の果の場末とて事なき常は寂寞たる町外れの草屋の軒深く住んで、今こゝに暫く猛獸の睡れる如き川上が籠居の門を不意に叩きぬ、

流石の黒田も打絶えて久しく訪はざりし今日、懐手のまゝ例の横着面をあけて、づかくと通りも得せず、入口に立ちながら殊勝氣の二聲三聲、

折しも妻女は今朝より濱町の生家へ行きて、飯炊の婆は臺所の片隅に耳遠ければ、手近き次の室にありし主人の三吉、のツそりと何氣なく立出でて顔みるや否、昔ながらの男振に大口あいて打仰ぎつゝ、
「やア來たな、まだ無事に生きて居たかい、はゝゝゝ」

まだ生きて居たかと、平生の無沙汰を一本まるられて、黒田おもはず苦笑ひ、

「昔は物を思はざりけり、急に何だか懐しうなッてね、は、は、は、」

生垣を繞らせし庭の隅々に自然に苔蒸して、武者立の樹蔭に土廂の深く差出でし書齋、何とやら浮世を捨てし風雅めいたれど、床に自慢の一軸も無くて必要の洋書漢籍を抛け込む如くに積み立てつゝ、此方の壁際には濱町より運びしか住居に不相應なる華紋緞子の長椅子、たゞ實際に簡便なる一閑張の大机を加之も自己が居形に押し据ゑて、悠々と片脰を凭せながらの大胡坐、さりとして客は客といふ體に土瓶の番茶を汲んで黒田の膝前に差置きぬ、

「おい、どうした其後は、久しく來なかつたぢやアないか、やはり依然として例の境遇、あまり惜しくも無いが男一疋、捨物にしてるかね」

「相變らず酷い御挨拶だが、まづ其邊だ、しかし今日は何だか妙に川柳子の若後家と

一般、叱られた事も戀しき魂祭りでね、想ひ起す汐入村の昔日、は、は、は、ぶらぶらと出掛けて來たのさ」

「此奴、うまい事をいふぞ、半年の餘も面ア出さずに、油斷のならん奴だ、さらば僕また君に分相應の川柳子が一句を借りて答へて曰く、
純友が來て誘ひ出す花の山、
ぢやアないかね」

「や、清淨潔白、決して謀反氣はない、ないが流暢洒落、ちよいとしたりした事でも流石に川上その人だ、面白い、話せるよ、とても上田の仙人や倉橋吉田の數理的が企て及ぶところにあらずだ、は、は、は、」

上げて下しても動ぜぬ川上三吉、じろりと冷かなる眼に黒田の面上を見ながら、聲なき微笑を肩に譲りて残る鼻頭の呵しさ、ふんといひぬ、

「なにを吐す、馬鹿な、久しぶりだから茶菓子の代りに合はしてやツたのだ、君に面

白いの話せるのと、いはれるやうになつて堪るかい」

「まだ君、さう早く露骨の丸出をしなくつても宜からう、茶菓子の後には一献の御馳走あるべき筈だ」

「無い、無いぞ、よし芳志はあつても無人で出来ない」

「なるほど、北の方の御姿が見えぬわい、いづれに行かれた、其後ますます、蕨蘭けて美しい御機嫌の體かね」

「今朝から生家へ往つて不在だが、居つても無効だ、とても歡待に預かれない近來の境遇だ、諦めて番茶でも飲め」

「は、は、悲しい哉この野郎一人だけが歡待に預かれないんだらう、上田といひ當家といひ、どこへ出掛けても令夫人には不思議と評判の善くない男だ」

「何が不思議なもんか、嗚アばかりで無いぞ、いづれの亭主どもにも批評の悪い奴

だ」

「ところが野暮界を去つて所謂の彼世界へ行くと、これで案外」

「黙れ、化物の世界だから人間の出来損ひが持てるんだ」

「人間の出来損ひ」

「は、は、出来損つて居らない料簡か」

「さア、さういはれると聊か困るが、また全然これ出来損ひでも、無からうかと思つてるがね、どツか寧ろ却つて出来過ぎてるかと思ふ自信する點もあるやうだがね、は、

は、は、」

「や、お互に開け放しの無遠慮な昔流で、かうはいふもんの、實ア黒田その點があるかも知れないよ、もしこれが世間へ出ての初対面とか、或は何等か時と場所を限つた一の事物に付いて他人行儀に談判でもすりやア、その惡摺れに摺れた呼吸と人を

馬鹿にする横着さが圖に當つて、なるほど寧ろ出來過ぎた男かも知れないさ、ねエしかし黒田、その呼吸も横着さも一切さらに效驗の無いところに却つて眞實の友情があるんだぞ、現在その證據には一言一句かう乃公に面の皮を剥かれながら、さのみ腹も立つまい」

「腹も立たないが、まアさのみ嬉しくも無いね」

「そこだ、うき世に對する喜怒哀樂を自然に忘れて、有難く思へ、腹も立たず嬉しくも無いといふやうな人間高尚の神韻に近い趣味が今、君の境遇として身として外にあるか、日夜たゞ罪惡のバチルスを養成する待合の亭主風情として、苟も一轉かゝる舊友の情に接し得るは殆ど僭上の至極、身分柄に不相應なる莫大の幸福だぞ」

こゝまで有難味を感じさせられては、いかな黒田も二の句は出さず、暫時そのまゝの無言に膝前なる土瓶より番茶を汲んで流し込むが如く二口三口、また葺の煙を天上に吹

き上げて朦朧たる行方に一種の眼を注ぐ體、川上おもはず微笑を含みながら、

「おい黒田、どうした、甚だ面白からぬ顔色を呈するね、はゝゝゝいくら捕捉どころのない瓢箪鯨でも乃公の前ぢやア固くなるから妙だわい、倉橋や上田ア此呼吸を知らずに自分が固くなつて不可ない、わけて吉田は眞面目に謙遜的の後進だ、よろしく此邊の消息を教へて置かう、しかし黒田、さう變に呵しな顔をするな、ふくれツ面は美人でも見よくないもんだ、まして其、その御面相、はゝゝゝゝ」

しまつた、うツかり轉ばされたと、黒田おもはず舌鼓を打ちながら、

「どうしても僕よりやア君の方が人ア悪いぜ、悪いが結局また談話に手應があつて面白よ、いはゆる基敵と一般の情、心憎くツて捨て難い友だね、はゝゝゝゝ諸その段になると上田や倉橋のやうな善人は實に與みし易いもんだ、あの善人ども生意氣に高を括つて、動もすると僕を見下し加減に來るからなア、寧ろ却つて黙々たる吉

田の初心が扱ひ兼ねるさ、や、吉田といへば近來、彼も聊か浮世臭くなつたやうだな、相變らず肅々として來るかね」

「君なンかと違つて萬事あの通りの秩序的に出來てるから、よくく己むを得ない外ア無沙汰をする筈が無いさ、しかし吉田が近來、浮世臭くなつたとは、全體どういふ鑑定だな」

「む、君、まだ今の宿所へ往つた事が無いね、あの上田、また何事も言つて來ないかね」

「いや、千駄木の林町で岡本かねといふ素人家の二階を借りた事は知つてるが、當分このまゝ、不出門の籠居で、吉田に限らず上田の家へも近來さらに行かない」

「そこだ、僕の鑑定が當るか當らないか一度往つて見るが宜いね、實ア其、その岡本かねといふのは四十前後の世話に碎けたらしい後家親でね、頗る惱殺的の美形を備

へた十六七の娘を持つてるが、加之も其娘なるもの、どこを見違へたもんか甚だ吉田に對して形勢不穩の態度だ、ところで例の上田が野暮な恐れを抱いてさ、強ひて吉田を自分の家へ引取らうといふんだ、はゝゝゝ」

「む、さうかい、外の事ア兎も角、さういふ鑑定だけは君に信を置いて聞くが、どうだ、既に業に出來た様子かな、まだ出來ない工合かな」

「かういふ事だけに信を置かれるなア少々なさけないが、まだ出來て居まいよ、しかし確實に出來るね、危機一髪の間だ、一見あの様子ぢやア、事に依ると母親が黙許の程度を越えて暗々裡に加勢するかも知れない、よほど吉田の勤勉と正直と初心なところが母子の御意に叶つて、加之も溢れてるやうだから」

「それに就いて、本人の吉田を何と見た」

「元來あゝいふ人間だから、上田が慌てゝ恐れを抱くよりも案外、じつと落着いて腰

強く前後を考へた上、自己に勝ち得るだけは堪へるだらうが、さて君、彼また木石にあらず、どうせ落ちるよ、第一また敵の本尊が自然の男殺しに出来てる女だ」

「ところで上田の引取説は、どう思ふ」

「無論、世間一般の平凡理窟から言へば善いこつた、しかし其平凡理窟が讀んで字の如く、さらに雙方の感情を害せず平々凡々に實行し得らるゝかといへば、もはや時機に後れて既に無効だ、相手の母子は固より吉田に於ても多少、妙な念を残して去るに相違ないからねエ、結局あの上田ア例の一本調子で事々物々に熱する外、浮世に對しての曲折が無いから不可ないよ、これが學生時代の吉田とか或は他に許し難き理由のため束縛せらるゝ吉田ならば兎も角、たとひ何にしても一の専門學を卒へて今年こゝに二十六、いよく世の中へ獨立獨行で出掛けようといふ彼に上田の如き流は有難迷惑だぜ、まづ早い談話が自分の昔を考へて見るが善い、あんな醜い鼻アで

も、や、元は君の北の方が腹心の家來で加之も首尾よく御夫婦にならせられた掛橋の忠義女を、かう悪く言ッちやア濟まないが、事實あれほど手の込んだ不出来な女ア珍らしいな、その人面に遠ざかった、化物然たる女でも彼奴が鼻アにする時、もし横合から變に邪魔を入れて見る、力先生あまり宜い心持はしない筈だにさ、は、は、は、まさか岡焼でもあるまいが、殆ど強制的の引取策ア却ッて本人のため善くないよ、願はくは君、こりやア君の口から異議を持ち出すべしだ、事は同じ事で理は一でも僕の口からちやア不心得の彼奴等、大に感じが薄いやうだ」

「いや、お饒舌り御苦勞、よく事情は分ツたが、分ツて見りやア猶更、なアに僕が口を出すほどのこつても無からう、また僕に聞かせたく無いから上田も吉田も來ないんだ、そんな事ア自然の成行に任して置く方が宜いさ、は、は、は、もう其談話は廢さうぜ、時に黒田、君は今日、まづ待合の亭主になツたが、この川上三吉この柳島

の籠居に斯く惘然してるところを、どう見る、何と見えるね、こりやア少々不得手だらうが試みに鑑定してくれ」
 喋々と饒舌り立てし甲斐も無く、黒田また轉がされて拍子ぬけの體、
 「もう、鑑定は御免だ、あれほど信を置かれた鑑定の御挨拶が、只これ御苦勞の三字だからなア、は、ま、ま、まして不得手の鑑定、どんな挨拶を蒙るかも知れないよ」
 「此奴、ちよいと拗ねたね、はッはッはッはッ」

其八

知らぬ相手の世の中に出ては、たとひ鬼でも蛇でも取ツて捻ぢ伏せるほどの男ながら、丸裸の昔より手足の裏を見られたる川上には流石の黒田も幾度か轉がされし體、今更ら小癢に觸へて其ま、柳島を飛び出しつゝ、辻車を驅ツて眞一文字に我家へ歸りし上、

うき世は萬事かうした爪弾の忍び駒に晝寢の酒でも飲んでくれんかと思ひしが、いや待て幸ひの道順、聊か喰ひ足らねど此腹癒せに與みし易き上田を襲うて、加之も其後の吉田いよく、林町を去ツて引取られしか、戀の絲目に搦まれし木像の形勢視察また妙なりと、どこまでも入らざる駄骨の横に張ツた奴ながら、さて其間には却ツて穢氣を帯びたる兄弟喧嘩に等しく、偽善の花を競ふ當世氣質の交際場裡には夢にも見られぬ一種の味あり、
 これも絶えて久しく訪はざりし本所横網町の上田が門口、その格子戸を、そツと音なく開けて、覗ふが如き額越しに差覗きぬ、
 「在宅ですかい」
 をりしも我口を開きながら箸もて我子の口へ晝餐をすゝめし妻女、おもはず振り返りて、

「おや、お珍らしい方、まア黒田さん其後どうなさいましたの、少しも入らツしやいません事ね、しかし御機嫌よろしく、また存じながら大變な御無沙汰を致しまして是非とも一度、伺はなくッては濟まない理由で御坐いますか何分、貴君、かやうな首枷が這入ッて居りますからねエ、ほ、ほ、これ坊や、久しぶりの伯父さんが來なすツたよ、丁寧ていねいに低頭おじぎをなさい、大きくなッて御世話になるんだから、さうだよ、も少し丁寧ていねいに」

わざと妻女さいぢよに寸隙すんきなき慇懃いんぎんの挨拶あいさつせられ、また今年ことしやうく丸三歳まるみつの小兒こどもに愛らしき頭かぶを下くだけられて、うツかり手土産てみやげにも心付こころづかざりし黒田くろだの苦くるしさ、柳島やなぎしまの腹癒はらせどころか炮烙ほうらくの刑けいに處しよせらるゝ心地こころち、

「いやはや、恐縮きやうしゆく々々、さんざ世話せわになりッ放はなしで、ひよッこりと來た奴やつですよ、唐たじ空かきに嚙かみ付ついて貫もらはないと被かッて來た面めんの脱ぬぎやうもない次第しだいで、は、は、しかし

坊ぼうは急にきふ大きおほくなりましたしたな、同じ巢すから這はひ出した汐入村しほいりむらの一味いみで子寶こだからを持もッてるなア上田うへだばかりだ、世よの中に多少たせうの不足ふそくあッても仕方しかたが無い、幸福かうふくの神かみは第一だいいち、こゝに宿やどッて居ゐますぜ」

嗚なッても喚わめいても心の底こころに一物いっぶつの無い天真爛漫てんしんらんまん、その上田うへだが不在ふざいと聞いて猶なほ更さらら出でるにも出でられぬ黒田くろだ、内兜うちかぶとを見透みすかされし妻女さいぢよと談話はなし甲斐がひも無い三歳みつご兒こを相手あひてにしなごら、ちくく、眞綿まわたの中なかより針はりもて刺ささるゝが如ごとし、

「上田うへだア全體ぜんたい、今日けふどこへ行ゆきましたな、時に吉田よしたまだ來きませんか、近々きんくあの林町はやしちやうを出でて、こゝへ引移ひきうつッて來るやうに聞ききましたか」

「はい、さういふこッてしたが、何なんだか急にきふ差支さしつかへがあッて、それで貴君あなた、この四五日にちは良人やども絶たえず林町はやしちやうの方ほうへ往いッて居ゐりますよ」

「はてな、その日ひにも決行けつかうするやうな勢いきほひだッたが、急きふに差支さしつかへがあッて、加し之かも毎日まいにち、

上田が出掛けるとは

「實は黒田さん妾も不審に思ッて居るんですが貴君、それに就いて何か御存じ御坐いませんの」

「いや、知りませんな、過日、ちよいと其相談を聞き嚙ッたばかりですから」

「おや、さうですか、しかし黒田さん、手前方を御出なすッて凡そ小一年も御目にかかりませんが、此頃は貴君、大層お氣樂な、御陽氣な、暢氣な意氣な御身分ださうで御坐いますねエ、さぞ御愉快なことッて、は、は、は」

「や、こいつア頗る閉口頓首、ぎやふんと、まゐりましたね、結局その馬鹿さ加減が意外の御無沙汰をする理由で、なアに襤褸を纏ッても例の大道で來られる境涯なら、あれほど世話になツたまゝ、馳の道ぢやア居りませんさ、は、は、は、それ一切いはぬ事、なけ無しの鼻ツ柱を捻ぢ切られるやうだ、さうでなくツても、をりく上田に

出喰はして十分、もはや申分のないほど遣られて居ますよ、は、は、は」

「だッて貴君、宜いぢやアありませんか、何を爲すツたッて別段、お手柄にこそなれ、ぶらくと立派な方が無職業の今この世の中で御自分の全盛を貴君、そこまで卑下なさる事がありますものか、せめて良人が貴君の半分か三分一も、浮世氣の捌けた働きが御坐いますとねエ、妾なんかも、どれほど安心するか知れませんに、まだ貴君あの通りの頑固で困りますよ、全體どうすれば世間並に立てる人でせう、何卒その呼吸を教へて戴きたう御坐いますよ」

「そりやア細君、あんまり残酷だ、實ア今朝、さんざ川上に骨を抜かれてさ、一方の血路を開くや否、やうくこゝまで近け伸びて來たところだ」

「おや、柳島へも往らッしやいましたの、つひ近くで居りながら、かういふ始末ですから月に二度か三度が、ヤツと關の山で伺ひますよ」

「そいつが半年ぶりに、關の山の十五六も飛び起えて忽然と出かけたんですからね、やられたく、以前どこへ向いても流血淋漓の體ですよ、はよよよ」

「なアに貴君、つまりは皆さんが貴君一人の御出世を羨んで、わざと喧嘩腰になさるんですよ」

「出世、御出世たア細君」

「御出世ぢやアありませんか、失禮ながら手前の二階に在らしった時の事を思へば、どれほど御出世なすつたか、良人が無理に吉田さんを引張って来るのも、やはり貴君に、あやからせたいんでせう」

ますます激しく切り込まれ、いよく手厳しく喰ひ付かれて、黒田おもはず半泣きの苦笑ひ、なるほど男兒いやくも食客的となつて世帯鼻アの世話になるもんで無し、どこまで意地悪く執念深いかと苦し紛れの一策に小兒の頭を撫でながら遁け出さんと

せし門口より主人の上田力

「やア此奴また、こゝへ來てるな」

前後に敵を受けて進退こゝに谷りし體、されど残酷なる背面の敵よりも聊か頼み甲斐ある前面の敵に對うて、押し戻すが如く門口へ飛び出しながら、振り返つて半は遁け腰、

「吉田また來ないさうだな」

「それどころかい、大變な事が出來たんだ」

「何、大變な事、どういふ事か」

「貴様に言つて始らないこつた、しかし今日どこへ往つた、わざく乃公の家へ來る筈ア無からう」

「實ア柳島へね」

「川上のところへ往ったア、此奴また餘計な事を饒舌ったな」

「いや決して、あまり久しく御沙汰したからさ」

「嘘を吐け、過日あの林町で喰はしたんだもの、あの様子を黙ってる奴か」

「は、は、は、しかし例の土で作った釣鐘だ、いくら叩いても音が無いからなア」

「川上ばかりぢやアあるまい、貴様また何か乃公の鼻アまで怒らしに來たな」

「どうして、どうして、それこそ反對だ、ぎゆうといふ目に逢はされて今こゝへ飛び

出したばかりだ」

門口と家内とは僅に格子一枚、居ながら差覗くが如き妻女の聲として、

「お二人とも其處で何をして在らっしゃるんです」

さくや否、黒田おもはず一時に目鼻を寄せて、

「あれだ、あれだよ、君のためにやア微妙の音楽か知らないが、僕の身に取っちゃア

食客的時代から、あの聲を聞くと等しく一種異様の感に打たれるね」

「馬鹿ア言ふな、兎も角、も一度這入れさ」

「這入るがね、どうか身體の熱の出ないうち放免して貰ひたいもんだ」

門口へ押し戻した奴、又家内へ押し戻されて、しぶく入れば妻女まづ良人を迎へて

の笑顔、

「今日は如何でした、段々よろしう御坐いますか」

「む、よほど経過が宜いよ、時に今日は珍しい客來だつたな、は、は、は、」

「あんまり久しぶりで、黒田さんか何人か一寸分りませんでしたもの、ほ、ほ、ほ、」

「また夫婦で復習が始る理由だな、儲かうなると衆寡いよく敵せずだよ、は、は、は、」

しかし今聞いてると何だか變な談話だな、もし吉田が病氣でも起したんぢやア無い

かね」

上田おもはず妻女の顔を見ながら、靜に黒田を振り返りぬ、

「どうせ知れるこつたから、言ッても宜いが、貴様この事に就いて當分、のこく、林町へ出掛けるこたア禁物だぞ、得て貴様ア事あれかしの突飛漢で、入らざる餘計な業をしたがる奴だからな、實ア黒田、過ッて乃公が不具にして仕舞ツたよ」

「何、不具にした、吉田をか」

「いや、娘を、あの吉田の居る家の娘を、それがため乃公も吉田も毎日、病院へ行くんだ、どうして宜いか申譯の無いこつたが、癩ツたところで跛躓にして仕舞ツたよ、本人の母子へは無論の事、將來また吉田に對しても濟まない事を強ひなきやア、この始末が付くまいかと思ッてるんだ、しかし今いふ通り此事に就いて一言も貴様、口を出してくれちやア困るぞ、まだ川上にも言はないくらゐだから」

かくと聞いては黒田も眞面目な男、まして打てば響く男、おもはず肩を擧めて腕を組

みながら、

「むゝさうか、さういふ事が出来たのか、しかし君、どうして、あの娘を」

「いや、どうしてもない、結局この上田力が過ッて他の娘の生涯の大疵物にしたんだらう、あくまで我等夫婦で、なし得るかぎり謝罪の實行を行末の力に盡す外ア無いんだ」

「わかつた、一切それで分ツた、なアに君、さう心配するにも及ぶまいよ、ぢやア吉田いよくあの家を動かなくなつたね、もはや動かす事も出来ず、また動かせまいよ、細君、こゝア猶更頼みますぞ、吉田を引取るよりも御厄介だが、あまり上田を動かさないやうにして下さい、實アかういふ事に僕を使ッて見ると、案外うまく仕上げるんだがなア」

「いえ黒田さん、平生は兎も角、いづれまた御相談を願ひに出るかも知れませんから、

其時は妾が」

「よろしい、何でも彼でも役廻りの悪い事ア遠慮なく持つて来て下さい、其段は無頓着の平氣面が一徳で、思ひの外に早く埒の明くもンですよ」

上田、苦しげに病める猛牛の呻るが如き聲、

「おい黒田、まア歸れ、歸ッてくれ」

其九

花ならば春の梢に色香ほつと含みし蒼一輪、よし思ふ人の急ぎ行く歩を停め得ずとも、浮世萬人の途上に競うて賞美さるべき筈を、あはれ無慙や不意の嵐に逢うて、まだ咲かぬうち莖の生際を吹き折られたる心地、

やうく小石川の病院より我家に歸りしが、なほ左の足首を板に挿まれ布に巻かれて

いき／＼と張り切りし眼を睜重汗の曇り勝に閉ぢつゝ、わざと解きし島田の亂れ髪を雪の富士額に振りかけながら、重ねし夜具の上に死せるが如く身を横たへしまゝの風情、動かねば疼痛なけれど人知れぬ心の悲歎に自然の色艶を失うて、いよく眞白に冴えたる顔面、如何に生涯の行末を涙に葬りけん、意匠を凝らせし名工の大理石に刻めるが如し、

まだしも男の子ならば兎も角、あたら十七の我娘を半殺しにせしかと、枕頭には猶さら堪へぬ涙の母親、おろ／＼付き纏ひながら聲を擧めて、

「ねエお春や、不意の災難といふものはね、生命を取られたッて仕様が無いンだから、まだ和女、それで濟んだのは運が強かつたンだから、しツかりと氣を持つて、第一あの上田さんが毎日々々、あの大きい身體を小さくしてさ、却ッて氣の毒なやうだよ、また吉田さんが和女、わけて此頃の御深切は、實に、全く親身も及ばないほど

だよ、たとひ、假令どうなつても、癒りさへすれば上田さんが、きつと身に代へて御禮をする事があると仰しやつてね、また吉田さんだつて、あゝいふ方だから決して和女、變に氣を落しちやア不可ないよ、いゝかへ、お春

「おツ母さん、妾、あの時なせ、一氣に死ななかつたかと、口惜しくつて、もし此まま跛躓にでもなつたら、どうしませう」

「大丈夫だよ、よし和女、萬一、萬々一さうなつたつて、あの上田さんは吉田さんの兄様も同じ方だらう、ね、さうして吉田さんが和女、宜いよ、和女を産んだ母が附いてるから」

「だつて、おツ母さん、跛躓になつたら妾、生きて居ませんよ」

「え、嫌な事をいふ子だねエ、縁起の悪い、これほど母がいふに、和女まだ、そんな馬鹿な、つまらない事を、するだけの心配は和女より母の方が、いくらしてるもんか

考へて御覽な」

思ひ過ぎて思はず高く母親の叱る聲、口惜しいやら悲しいやら娘氣の一筋に夜具へ喰ひ付いて泣く聲、廣くもあらぬ上と下との天井板一枚に、さらぬも針の席に坐せるが如き吉田雄藏、堪へ兼ねて靜に降り來りぬ、

「どうです、少しは氣分が宜いやうですか」

「はい、有難う御坐います、もう貴君、お醫者様も、歸つて養生が出来ると仰しやるくらゐですから、しかし御承知の我儘でね、ほんとに困りますよ、どうか御迷惑でも貴君、何とか一言、叱つてやつて下さいましな」

「いや、どちらを、どうとも言ひ兼ねますが、實は濟まない事をしましたよ」

「だつて吉田さん、さう貴君が何も」

「いや、上田も僕も同じこつてす、しかし女主人、あの上田はね、ありやア外貌

に似合はない氣心の優しい律義一片な男でね、わけて自分の過失から斯ういふ事になつて、それを毎日々々あの通り來たのは、あの大きい身體が瘦せるほど苦しがつて居ましたよ、ですから甚だ勝手がましいやうですが、昨日かぎりで、もはや病院より歸るやうになられたを幸ひ、當分まづ來なくつても宜いと言つてやりました、その代理に女主人、上田の盡すべき事は僕の責任で、いはゞ當然、二人分の心配する理由です、と言つて何の役にも立ちませんがね、出来るだけの事は、する覺悟ですよ、どんな用でも御遠慮なく、打明けてね、使つて貰つた方が却つて此方の安心ですよ」

「これ和女、お春、今、吉田さんの仰しやる事を聞いたかエ、あれほどまで言つて下さるんだもの、しつかり氣を持ち直して、有難く思はないと罰が當るよ」

「女主人、さういはれると猶更ら辛くつて我々の立場が無くなりますから、どうか通例

の言葉で、お春さんの氣の靜まるやうに願ひます、もし我々が女ででもありやア、また枕頭に付き切つて手の届く介抱のしやうもあるんですが、わけて無器用な男二人で、それぢやア却つて御本人のためになるまいとか差控へてる事もありますよ、しかし上田は勿論、この吉田雄藏だつて、まさか今このまゝの貧乏書生で、いつまで惘然もして居らない覺悟ですから、他日また或は、どういふ場合に、どういふ事で、今日の萬分が一を報ぜられないとも限りませんよ」

「お春、何とお和女、御挨拶をしないかね、身體は動けなくつても口は吐けるだらうにや」

「なアに女主人、餘計なこつた、時に今日ちよいと上田の家まで往つて來ますから、すぐ歸ります」

「おや、さうで御坐いますか、どうか上田さんに宜しく、また御安心下さいませや

うに」

二階より降り来りし吉田の躑音を耳にするや否、そつと寝ながら枕の顔を反けて夜具の襟に半面を掩ひつゝ、如何に言はれても慰められても、無言のまゝに絲ひく如く眼を閉ぢしが、その吉田の立出でし後、やうく身を動かしての小聲、

「おッ母さんは自分の子より他人の方が大事と見えて、いつも吉田さんの前では妾ばかり吐ッてさ」

「馬鹿な事をいふよ、自分の子を捨て、他人を大事がる親があるもんかね、やはり和女の爲を思ッてるからさ」

「だって、吉田さんなら、まだしも、わざくあの上田さんに、こんな目に逢った上田さんに、宜しくの、御安心して下さいのと」

「わからない子だね、うてば響くで、浮世の義理人情、そこが却ッて、猶更ら和女の

ためだよ」

「和女のため、和女のためッて、どこまで妾は、和女のためで叱られるンでせう」

「また妙な事を言ひ出すよ、さう理窟が言ひたいなら何故、なぜ吉田さんの居なすッ

だ時、言はなかつたんだよ」

「理窟も何も、いひたい事は無いんですが、妾おッ母さん、かうなッて」

「さ、それが今更、かへるかね、だから」

「だからッて、妾、口惜しいもの、こんな身體になッて」

「その口惜しい、悲しいだけの事は、あの吉田さんが、きツと必ず、いはなくッても十分、呑み込んで在らッしやる方だよ」

折しも往來を駈け行きし人車の音、俄に停りて三四間の彼方より我家の門口を引返しつゝ、轆棒を卸すや否、格子戸がらりと内に入りし體、母親おもはず起ッて障子を引

き開くれば、只一度ながらも無遠慮の饒舌と梯子段の立往生とに見忘れぬ人、

「おや、入らッしやいまし」

「女主人、過日お邪魔した黒田といふもんです、吉田ア居りますか」

「はい、吉田さんは生憎、只今」

「む、不在ですか、いや彼の居らない方が却ッて宜いでせう、實ア女主人に少々」

軽く門口を振り返りて車夫より受取りし重たけの菓子折、二尺四方もあらんかと思はる、を新聞紙に包みしまゝ、

「つまらないもんですが、ちよいと来たまでの印です、娘御の枕頭へ置いて下さい」

いひつゝ、自己が家に歸りし如く二階へ上り行きぬ、
初對面の時といひ今日の體といひ、あまりの無遠慮さに呆れながら、この菓子折を娘の枕頭へといふからは、聞き捨てならぬ友達甲斐に見舞かたゞ訪ひ來し人と、煙草

盆やら茶盆やら兩手に持ち添へて二階へ上り見れば、はや我物貌に吉田の坐蒲團を敷き込で机に脊を凭せ袂よりマツチを取り出しつゝ、煙を天井に吹き上げぬ、

「や、女主人、忙しい中の、お手を止めて嚙、御迷惑でせう」

「どう致しまして貴君、また只今は結構な御菓子を」

「なアに禮をいはれるくらゐなら、まだ少しは持つて來るもんもありましたがね、ただ車上の途中からさ、時に女主人、娘御が大變な事で、加之も上田が、あの上田の奴が出来したと聞いて猶更、實に濟まない理由ですが、おひくゝと宜しい方ですかね」

「はい、有難う御坐います、いえ貴君、全く不意の災難で何も別に上田さんが、却ッて上田さんや吉田さんの御心配なすつて下さるのが、お氣の毒で御坐いますよ」

「さういはれちやア我々、いよく挨拶に困りますが、どうか其邊で、諦めて貰ふよ

り外に仕方の無いこつてす、しかし上田め、とんだ事をしましたよ、元來ありやア
 身體の割合に、案外、小兒めいたところのある男で、また今日の時勢には女主人、
 わざく、生まれて來なくツも宜いほどの馬鹿正直でね、その案外な小兒めいたところ
 ろと當世不向な馬鹿正直の點と一時に出喰はすやうな事があると、彼奴をりく、狼
 狽へて本意にもない失策を出來しますよ、わけて此度の如きは彼が生涯の大失策で、
 つまり大切な出世前の他の娘を、こんな事にして仕舞ったのですから、實に本人あ
 の氣質で五六年の壽命は確に縮めましたらう、また吉田も御承知の通りの人間で
 すから、決して世間普通の友達が過失をしたやうには思つて居ませんよ、もしこれ
 がため目下、將來どんな事になるとも、口にくそ出しますまいが、必ず卑怯に遁足
 を踏む如き片々たる輕薄な奴ぢやアないですよ、だから女主人、どうかね、この邊
 の理由を、よく娘御にも得心なさるやう言つて下さい、この黒田また平生は兎も角、

かういふ時には世間普通の友達でない覺悟ですから、わけてあの上田とは多年の間
 柄、加之も互の氣心が違つて年が年中、まるで犬と猿のやうに喧嘩面ばかりして居
 ますがね、儲どういふもんか不思議に離れられない因縁のある交情ですから、その
 上田に就いて起つた過失上の始末は随分、男として身に引受ける決心です、しかし
 決心の實行には僕よりも差當つて吉田に適當な、いはゞ行ひ得らるべき都合の宜い
 事もあるかと思ひますから、實は其、その相談かたぐ、いや内談に來たのですし
 折も折とて猶更ら迷惑の客來と思ひの外、丸く打解けし浮世の人情に行届いたる言葉
 の端々、此方に言ひたき心の底を露も残さず汲み取られて思はず膝を進めぬ、
 「まア貴君、わざく、恐れ入ります、さういふ事で御坐いますれば、手前より伺ひま
 すもの」
 「は、は、來られては少々、自慢の出來兼ねる境涯ですよ、また當然、此方から足を

運んで来るべき筈のモンです、ところで女主人、僕はね、上田や吉田と違つて萬事この通りの開けツ放しで、無遠慮に露骨に自分の思つただけ相手かまはず饒舌る男です。ですから、その覺悟で事の結局を聞いて貰はないと困りますよ、よろしいか、實ア毎々この流に餘計な輪をかけて毒口を叩くので、あの上田や吉田に嫌はれるンですよ、はッはッはッはッはッ

「なアに貴君、いづれも捌けた方は皆、さうで御坐いますよ、ほ、ほ、ほ、ほ」

「うまく捌けて居りやア宜いが、わるく解け過ぎて結び目の無い奴だから困る、は、は、は、は、戯談は儲置いて女主人、手ツ取早く話さう、今更お世辭をいふ理由でも無いが實際あの美貌だもの、養子を取るも嫁に出すも相手は此方の選取お好み次第で、いくら高く止つても先方から飛び付いて来るやうに出来て居た娘御だが儲、現在かういふ事になつた以上は、自然また已むを得ない成行で、さう濟まし切つても居られ

まい、かと思ふ點がありますね」

「かう申しては何だか、お言葉に付いて恨みがましい事をいふやうで御坐いますが、實は貴君、それでね、どのくらゐ心配いたして居りますか、無事で居てさへ、あの通り人様の中へ出しかねるほどの我儘ものが、もし萬一、もし跛躰にでもなりまして上は猶更ら以て」

「や、そこだ、そこだ、それに付いて來ンですがね、どうです、お氣に入るまいが、いッそ思ひ切つて、吉田の嫁に下さらないか」

「黒田さん、いえ黒田さん、甚だ失禮で御坐いますが、それは貴君、眞實の御相談で御坐いますか」

「外の事と違つて、これが嘘に話せるこつてすか、苟も人事一生の大禮、まして無遠慮に一皮を剥いていへば、まづ不具になるを承知で貰はうといふ此方の料簡です、

實はね女主人、それごとく今でこそ別れて居ますが、もとは我々多年の一つ穴から苦學難行を経て来た兄弟に等しいものが五人あつて、上田も吉田も僕も皆そのうちの一人です、しかし吉田が最も年少後進で、また最も眞面目で謹直で浮世の波瀾なく修學したもので、兎も角これが五人の後殿に出ようといふ人物になつて居るんです、だから本人も其覺悟で、なアに現在そのまゝ賣つても一身を過すぐらゐの代價は持つてる男ですが、まだ今後八九年は貧乏書生の境涯を甘んじて、自他ともに大器晩成を期してる折柄、こゝは少々、いひ憎いが女主人、あの頑固で正直一遍の上田ね、彼奴、大に容を改めて娘御の美を恐れましたよ、はゝゝゝ人間木石にあらざる上田は吉田の前途に就いて頗る宜しくない障碍物があるといふ理由で、はゝゝゝとこゝろで内々、頻りに吉田を促して、いよく自分の家へ引取る事に取極めた最中、自己この一大失策を出来したんですから、いやはや其以來ぐうの音も出さず、自分の鼻

アには噛み付かれる、吉田には氣の毒がる、當家へは猶さら申譯なしで、殆ど滑稽の極、あはれなほど小さくなつて凋れましたよ、はゝゝゝ」

「まア御氣の毒様な、さう御心配なさらないでも」

「否、するなと言つても儲かうなると俄の反動で、人一倍の恐縮する奴ですよ、そこで上田は勿論、あの吉田も實は心中、もし娘御が不具にでもなられて、これがため世間へ一身上の自由を缺くやうな場合には、寧ろ好んで、進んで、いはゞ謝罪の實行的に、迎へて以て生涯の妻にさせたいしたいといふ決心です、しかし上田も本人も、また互に其處まで口を切つて言ひ出さないから、此事に關しては利害の無い兄弟分の僕が不意に横合より一人、飛び込んで、ちと勝手過ぎた口上ながら却つて御安心のため、まづ下相談を極めて置きたいんですが、どうです女主人、無論、かういふ不意の災難さへ無くば綱の目より手の諺で、とても書生肌の吉田では不満足で

せうが、さて今日の不幸な結果から考へると、つまり時の相場で安く買はうといふ理由ぢや無いが、さのみ男に持つて恥づかしくなし、前途また今のまゝで居らない見込のある吉田ですぜ、こりやア上田のため吉田のため二人の兄弟分として最良目の味方根性で無く實際、母子のためも思つてのこつてす」

例の辯口に喋々と饒舌り立て、後、靜に茶を飲み貰の煙を吹きつゝ、どうだ文句はあるまい、あつて堪るもんかといふ體に濟まし込めば、さらぬも嬉し涙を兩の目に浮べし母親、高を括つて拔駈の功名しに來た此横着野郎を今更ら佛神の如く伏し拜みぬ、「實は黒田さん、うちあけて申しますが、初めて吉田さんが手前方へ御越しになつた時から、内々、不束な娘でも子に持つた母心は格別、づうくしいもんで御坐いましてね、もし萬一、願へる事ならばと、幸ひ小石川の或お屋敷から歸りましたのを其まゝ手許へ引き止めて置きましたくらゐで、それが貴君、外の方ならば兎も角、

現在その吉田さんの御兄弟も同じやうな上田さんのため、かうなりましたので却つて、何だか猶更ら押つけがましう、無理往生に、お願ひのしようもない結果になつて仕舞つて、どれほど残念に存じましたか、實は一人の娘を捨物にした覺悟で、泣いて居りました折柄で御坐います、しかし無事で居てさへ、あの通りの娘を、不具になつて黒田さん」

「いや、その心配無用、憚りながら決して世間普通さういふ吉田ぢやア無い、むしろ無事で満足に華を飾つて居りやア、たとひ申し込まれても謝絶するかも知れませんが、あゝなつた以上、その有形に不幸な可憐の缺點は、反比例に無形の愛情を惹くべき戀の主眼となつて到底、餘所に見捨て得らるゝ男で無いのみならず、彼は元來の山間兒で、片々たる才子肌の都人士と違つた案外の外貌によらない不屈不撓の意地も持つて居りますから、たゞ一時の感情に制せられたり、また當坐の義理に迫つ

たりする筈なく、娘御の行末に就いても長く大に安心すべき良人です」

「まア黒田さん、娘は何といふ有難い、冥加の善い幸福なもので御坐いませう、あんまり勿體なさ過ぎて、罰が當って、夭折でも致しはしますまいか、事實これが怪我の功名といふもので御坐います」

「や、なるほど怪我の功名、は、は、自然の洒落になつたわい、は、は、しかし女主人、何事も縁だ、さう卑下するにも及ばないが、また吉田も前途に希望のある男ですから、あまり際立って無用の形式的を急がないやう、その邊よく心得て居て下さいよ、なアに身體さへ癒りやア直そのまゝ同衾に寝かしても宜いさ、は、は、だが世帯を持つとか家を持つとかいふ事だけは暫時、ね、は、は、これで以上まづ目出たく無事に済む結果だ、いづれ其うち、また改めて來ますから、どうか娘御にも宜しく」

「まア貴君、黒田さん、外の事と違つて、このまゝお歸し申しましては、あまり、御迷惑でも是非、御酒の眞似事だけ」

「なアに其儀に及ばれるやうな氣の利いた媒介人で無いさ、は、は、」

「それでは貴君、横になつたまゝ、甚だ失禮では御坐いますが、せめて娘にも一言お禮を」

「いや、猶更ら以て無用のこつた、第一また身體の動けない娘氣に顔を赤くさしちやア氣の毒だ」

「それぢやア萬事お言葉に甘へまして、今日は兎も角これで御免を蒙りますが、なほ何分とも此上に宜しく願ひます、しかし黒田さん貴君の御宅は」

「さ、そいつが聊か困るんですよ、まさか塵埃と雪隠の挾撃に逢つてる裏長屋でも無いですがね、いや其うち必ず此方から出て來ますよ、は、は、は、」

門口へ待たせし人車に飛び乗って、そのまま悠然たる上げ面に駈け行きしが、おもはず獨り車上の微笑を漏らしぬ、

さア面白くなつて来たぞ、いやしくも汐入村以來の五人中、あの吉田めが只一人、野暮に濟まし込んで通さうとした甲斐も無く、やはり變な工合で己むを得ない云々の相手に喰ひ付かれて仕舞つたわい、加之も吉田の爲に師父の如き面をした上田の失策から一轉して忽ち跋躓の鼻アを持つに至つて、猶さら妙だ、もはや斯うなつた以上、どうせ早いか遅いか同じ結果にしても、本人の吉田と上田に相談なしの搦手から、そつと拔駈の一人極に取極めた事を知つたら、奴等どういふ勢ひで向つて来るだらう、そいつ更に一入の見物だが、當分まづ君子その危きに近寄るべからずだ、は、は、は、

其十

吉田雄藏、そもく盆と正月の外は白き米の飯を食はざる程の山奥に生れ、猪猿を相手にして生涯の運命を谷間の巖蔭に送るべき筈の身が、たましく日本一の大都會に出でて、もし此まゝ一身の衣食を求めんとすれば直ちに求め得らるべき今日の結果、これを二十六の山間兒として人生の幸福こそあれ、さらに何の遺憾も不足も無し、されど一見さらに愚なるが如く黙々として木像に等しき斯の山間兒、たゞ都の空に事なく雨露を凌いで足れりとせず、また白き飯を糞とするだけの藝能に終る能はず、さらに奮勵一番、悠遠なる前途に向うて人知れぬ心は天馬の空を奔る勢、殆ど一身の精魂を賭して他日の大器たらんとする折柄、おもはぬ路傍の落花一輪に幾何の時と心を奪ひ去らるゝかと思へば、身を削る斧の諺、これぞ正しく我がために作られたるの感あり、

加之も宿志を遂げ事業を成せし曉は、身の境遇に應じ時の程度と階級に従うて、殊更

無用の力を盡さずとも、居ながら正當に娶るべき筈の妻なるものを、何事ぞ人生行路の半途に我意を枉けて、いまだ門外一步の社會に足跡だも印せざる今日、早く既に良人たる名を家に呼ばれんとする心中、誰に向うて訴ふべきか、まして去るべき時に去らざりし我にもあらず、その居るべからざるを知ツて去らんとせし一刹那、たましく我この額に思はぬ不意の疵を受けて遅れ、やうく癒えて意を決せし時は再び思はぬ不意の火災に妨げられ、いよく我みづから我を叱咤して身を起せし時は、不幸また我を思ふ我友の過失に制せられて心ならずも竟に今日とはなりし我、もはや去らんとして去るを得ず捨つるに捨て難き自然の結果を見れば、あゝ我こゝに今この女を妻とすべき運命の外、如何に忍ぶも謀るも人力をもて竟に遁るゝの道なかりしか、

わけて天生の名花そのまゝ元の美貌なれば、我一人こゝに無情の木石漢となるも、必

ずや世間萬人の競争場裡に賞美さるべきもの、されど今日、その花の色香を我ため我友に踏み潰されしかと思へば、もはや世間萬人の捨て、顧みざるもの、我一人これを拾はずして誰か其涙を汲むべき、

さても運命の神に弄ばれしか、但しは斯くなりし自然の情縁に繋がれしか、おもはぬ花の一瓣を損じて滾れし露の零は、恐るべし音も無き木像の腸に深く染み込みぬ、

丸裸のまゝ二十貫目以上といふ大兵肥満の男が、風さへ厭ふ十七の處女、加之も綿の如く柔かに眞白き左の足首へ力み返ツて落ち來りしほどの大怪我、いづれ満足には濟むまじと諦めながら、もしやと思ふ心の慾に引かれて朝夕の神に祈りし甲斐も無く、やうく苦痛は去りて醫術の及ぶかぎり療治の行届きし後を見れば、果して女一代の秋風肅殺、あはれや竟に生れもつかぬ跛躓となりぬ、

人目に立たぬ鬢の毛たゞ一筋を抜かれてさへ、花に嵐の身を研らるゝ如き娘氣が、悲しや色も香も一時に失うて生涯の不具となりし事、はや浮世に生きて甲斐なき心地、いかに口惜しき涙の淵瀬に沈みけん、

いよく今日こそと醫者の言葉に許され其身も思はず病床を離れて、こはく、筆筒の角に取縋りながら、そつと音なく二歩三步、淺瀬を渉る鷺の如くに踏み出すや否、わつと其まゝ其處に身を轉がして泣き伏せし時は、傍で見る眼の母が心は固より、わづかに天井板一枚を隔てを耳を欬てし吉田雄藏、満面の目鼻を寄せて電氣に打たれたる體、一種いふべからざる總身の吐息を漏らしぬ、

まして其後の哀れさ、たゞ物も得いはで友なき獨り我身の不運に泣き腫らしたる眼元、朝夕じつと坐したるまゝに動きも起ちも得やらで、いつしか何となく力なけに瘦せし頬の邊、わけて厠に行くさへ盜むが如くに恐れて餘所を憚る恥づかしけの風情、をり

をり人なき時を窺ひつゝ、逆も叶はぬ事と知りながら、もしやの一念に我影を振り返りつゝ、歩む稽古の辛氣らしさ、それを見るとは無しの眼に入る吉田雄藏、猶更ら腸を斷たるゝ苦痛あり、

そもく世の中に美人の数は一人にあらずして加之も世の中に我は只これ一人なり、まして二十六の今の時期は我一身に再び來るべからず、されば我より外に無き我一身を數ある美人のために投じ、また再び來らざる今この時期を今に限らぬ戀のために失せん事、五より二を引いて三を答ふる如く小學校の兒童に問うても利害の數を誤らざるべし、ざるを何事ぞや苦學十年の丈夫兒この愚に迷ふかとは、いまだ事こゝに至らざりし時の吉田雄藏なり、

されど事こゝに至りし後の吉田雄藏は、その小學校の兒童も忽ち言下に答へ得べき簡

單の數と思ひの外、今ぞ始めて知る人智不可思議の情緣、たゞ一人の處女を過つて生涯の不具とせし同情の涙ばかりでなく、また徒らに自己が運命の一部を割いて何物に供せし義侠の愛ばかりで無く、固より人生行路の的とせし戀のために組み敷かれたるか我で無く、さらに其他の恐るべきものありて理外の纏綿に縛せられたるが如き心地、ほつとして夢の如し、

額の冷汗もろとも眞實の表に現はれし上田が言葉といひ、確とは聞かねど行末の慈愛を込めし吉田の言葉といひ、あの鐵砲玉に等しき黒田が言葉まで佛神の如く、此奴そもく、高を括つて惡戯半分に飛び込み來りし拔斷の横着野郎と知らねば、はや嬉しく目出たく事の定まりし心地しながらも、既に事の定まりしだけ猶更ら遠慮勝、まして現在の不具となりし我娘を母の口より押つけがましき催促もしかねて、それとは無しに

思ひ餘りし朝夕の壁訴訟、

吉田雄藏また人知れぬ無言の心中、はや既に何をか期するところはあれど、明りに我より振り返りて口を出すべき筈なく、加之も睡れる如き元來の自重謹慎、およそ免れぬ事に迫るか物の叶はぬ瀬戸際までは例の黙々たる木像、晝は三尺の半窓に對ひ夜は一點の灯影に頭を埋めて致々たる瞋勉の體、如何に緻密の觀察力を備へたる視線中にも心の底に潜める近來の異狀は認め得られざるべし、

「吉田さん、まだ御勉強中ですか、もう貴君、よほど夜が更けて居りますよ」
 「なるほど、このランプで油の減り工合を見ると十二時三十分、そろく一時に近
 いやうですな」
 「おやまア御便利の御時計で、ほ、ほ、時に此頃は、あの上田さんが暫時、入らッし

やいませんね」

「や、實は絶えず來たいんですよ、また來る用もありますかね、わざと當分のうち、差控へてるやうな様子です」

「何故、何故で御坐います、どういふ理由で御坐いませう」

「あゝいふ男ですから、何か、自分の氣に咎めて、見るに忍びないところが、あるらしいです」

「さう承りましては、お春の事を、お氣になさるやう聞えますが、もしそれならば貴君、もう癒ッて仕舞ッてあゝなツたんですもの、どうか是非とも今まで通り、お心易く來て戴きませんと、却ッて母子が氣に咎めて、ねエ吉田さん、恐れ入りますが貴君、明日にも直接お連れ申して下さいませ」

「そこですよ、あゝいふ失策があつたに拘らず、さう萬事うち解けて、あまり快活

に、あまり氣心よく言ッて下さるので、彼は猶更ら自己に願ひて、どうも平氣に來られないやうです、人情また上田で無くツても、かうあるべきが當然ですからなア」

「まア吉田さん、貴君まで、そんな他人行儀で困りますねエ、實は貴君の面前で、かういふ事を申しましては何だか、妙に、自分の勝手ばかり急ぎますやうで、濟まない理由になります、是非とも上田さんと御目にかッてお願ひ致したい事も御坐いますから、もし御差支さへなくば、手前の方より伺ひたく存じて居りますくらうで」

「はゝア、さうですか、さういふ事なら、なアに端書を出しませう、あれでも用があると言やア直ぐに駈け付けて來ますよ、しかし女主人、どんな用ですね、上田で足りる事は僕でも足りませうから、御遠慮なく」

「はい、有難う御坐いますが、まさか貴君、いくら押の強い妾でも、現在の御本人に

向ッて、ほ、ほ、ほ、實は、あの黒田さんと仰しやる方も、過日、わざく、それがため、お越し下さいましてね、大畧、思召のほども伺ひましたが」

「む、黒田が来ましたか、何日ごろです」

「さやうで御坐います、まだ娘が寐て居ります時で、生憎、貴君が上田さんへ往らッしやいました御不在中、もう十日の餘になりませう、いえ其節、すぐに上田さんまで御相談に出ようかとは存じましたが、やはり今日まで申し上げ兼ねまして」

「はてね、兎も角あの黒田、わざくそれがために来たとは、全體、どういふ事で来ましたね」

「い、え吉田さん、どうせ、また貴君へは萬事そこまでの委しい事を仰しやりますまいが、もはや上田さんとは御内談が纏まつて、わざく御足勞下さいましたので御坐いませう」

「いよく變だ、實ア女主人、あの黒田と上田とは平生から少々、あまり氣の合はな
い方ですから、さういふ内談の取極などは」

「そりやア黒田さんも、御自分で仰しやいましたよ、どういふもんか平生は互に喧嘩ばかりするが、外の事と違ッて儲、かういふ事は格別だと」

「や、ますく分らない、しかし女主人、つまりは何のこツてす、私の前で言ッちやア不都合な理由でも、あるんですか」

「ほ、ほ、何を貴君、そんな理由があッて宜しいもんで御坐いますか、たゞ母子が、あまり口に幅ンで、ほ、ほ、ほ、まア吉田さん、兎も角も上田さんに御目にか、ツた上あられためまして、どうせ御迷惑な事に」

さては黒田め、また入らざる事を聞き嚙ッて、わざく横合より飛び込みしのみか、いづれ面白半分は無用の駄辯を弄せし横着面、ありく眼に見る如く思へど、怒ひ根

を掘り起して眼前の小面倒を起さんよりはと、吉田雄藏そのまゝ餘所に言葉を外せば、また此方も流石に本人の面前よりは兄分に當る二人の面前、まして既に内談の取極りし事と、同じ其まゝの餘所に言葉を外らしぬ、

「おや、うかくと大變お邪魔いたしました事、しかし吉田さん、いつも、さう思つて居ながら、つひく御遠慮いたして居るんですが、あまり貴君、そんなに御勉強ばかりなさいましては却つて大事の御身體に、せめて夜は十時とか十一時とか」

「はゝゝゝ大丈夫、これで女主人、なかく骨組の工合が悪く出来て居らないやうですぜ、この通りの瘦ッほちで外觀は大きくありませんが、もし萬一の時は大道の方としても一人前は取つて見る覺悟です、はゝゝゝ」

「ほゝゝゝをりく、貴君、眞面目な御顔で、ほゝゝゝ御戯談を」

「なアに眞實だ、もし生れ故郷に居りやア、米の飯を食ふ平地の土方どころか仙人の

出来損ひを見るやうな藤蔓を帯にして巖角を駆け廻りながら都人士の夢にも知らない稗の粥さへ食ひ兼ねる奴ですよ、其奴が運よく都の空で馬にも蹴られず、かういふ樂な境涯に居るんですもの、有難く思つて及ぶだけの勉強せずに済みますかといへば、何だか大層、偉いやうですが、やはり實ア世間普通より脳味噌が足りないから、仕方なしに骨を折るんですよ、はゝゝゝ」

「ほんとは吉田さん、お世辭でも何でも御坐いませんですが、どうして貴君ア、さう自然と御立派に奥床しい御氣性に出来て在らっしゃるんでせう、もし世間に貴君の御年輩で貴君の半分も事を仕上げたらしいかと思ふ人は、それこそ吉田さん、鬼の首の五個六個も取つて脊負つたやうに自慢の鼻息が荒くつて、なかく眞正面からは向はれないくらゐですよ、現に、さういふ人を幾人も存じて居りますもの」

「主人、もし僕の半分といへば普通一人前の四半分にも足りませんぜ、はゝゝゝし

かし、そんな談話は止ませう、ところで例の便利な時計を見るに、もう一時を過ぎた油加減ですから」

「おや、まア宜い氣になつて、自分の勝手な饒舌ばかり、嘸お蒼蠅う御坐いましたらう」

「なアに、かまひませんが、そろ／＼寝る事にしませう」

其十一

いよく免れぬ事に迫るか叶はぬ瀬戸際に立至るまでは、さらに動かぬ謹慎自重の吉田雄藏も、入らざる場所に猶更ら湧くが如き無用の才氣を振り廻す黒田めが飛び入りと聞くより、もはや例の黙々たる木像のまゝでは居られず、夜の明くるや否、上田の許を訪はんとて立出でし門口へ郵便の聲、見れば柳島の川上三吉より一葉の端書、

いつもながらの文體に達筆の墨痕、飛ぶが如し、

去月初旬に突如として黒健來訪、其節の珍談中に案外の貴下を主人公として喋々いたし候へども例の蓄音器と心得たゞ一笑に附し去り候處、昨夜また襲來いよいよ以て形勢不穩の狀を報じ候、眞爲は兎も角、横網の君子同道まち入り候、荆妻曰く、今日ばかり空手では承知いたさず候との事、呵々、

かりそめにも人間の大師、いづれ打明けて語る筈ながら、思はぬ上田の失策より事ここに至りし意外の情緣、いよく事實の表面に定まりし後の事とせしに、あの蝗蟲め、はや柳島まで素早く飛び込んで、まだ整はぬ穂先を喰ひ荒せしかと舌鼓を打ちぬ、さらぬも拭ふべからざる我生涯の大過失として、其後の日夜たゞ自己の心を責めし上

田力、かくと聞くや否、鷹の如き大眼を剥き出して猛牛の如く呻り出しぬ、
 「や、あの野郎、いはない事か、得て貴様ア他の鼻頭へ餘計な口を出したがる奴だから、一切これに就いて指もさす事ならんぞと、あれほど堅く押へて置いたに畜生、のこくく相手の林町へ出掛けたのみか、我々の素股を潜って柳島まで飛び込んだとは言語道断、怪しからん泥溝鼠だ」

「實に困りますなア、無論、前夜、女主人から談話の工合を聞いて見ると、イツそ鐵槌的で破壊主義の方なら却って後の始末も簡單ですが、寧ろ我々を有難迷惑の不意打に狼狽さすため、時も何も關はず頻りと無鐵砲の相手を擔ぎ上げて、いは自分一人料簡で萬事一切取極めて仕舞つたらしいですから、猶更ら目下の利害上に困りますよ」

「さういふ奴だ、どうせ自己が勝手次第の高慢面で、さんざ好きな熱を吹きやアがったらうよ、まして心易い柳島では猶更の事、何を吐いたか知れやアしない、しかし吉田、もはや斯うなッた以上は五十歩百歩だ、氣の毒ながら、實に濟まないが、彼等母子に對して上田力を立て、くれ、せめて約束だけでも早く結んで置いて」
 「兎も角も柳島へ同道した上、あらためて今後の御相談をしませう」
 「なるほど、つまりの持ち込み場所は川上だ、ぢやア改めて今日、柳島で一決する事にしよう」

上田と吉田の兩人、いよく最後の一決に打揃うて來るとは夢にも知らず、主人の川上三吉また一葉の端書を投じて招きしとは顔色にも出さねば、例の黒田健次うかくと三度目の横着面をさけて柳島を襲ひつゝ、今や近來の興に我を忘れし膝を乗り出しながら、そろく川上夫婦の面前に傍若無人の熱を吹き始めぬ、

折しも耳を劈く破鐘聲、たのむといふ上田の一聲を聞くや否、おもはず飛び上ツて狼
 狼眼の中腰に起ちながら、

「さア仕舞ツた、おい川上、とツか其邊に隠れるところは無いか、何、無い、無いぢ
 やア困るよ彼仙骨、かういふ時は頗る蠻勇を帯びてるからな、細君々々、苟も黒田
 の身を取ツて一大事です、さう無情に濟まし込んでは、やア無効だ、のそく上ツ
 て來やがツたわい」

はや既に上田と吉田の兩人が入り來りし體に、今は絶體絶命の黒田、進退谷ツて川上
 夫婦の間に身を縮めつゝ、葺の煙を吹いて朦朧たる中より化け損ねし狸の如く、じろ
 じろ無言の額越に見上げぬ、
 目早く見て取りし上田、平常に無き一種の眼光に睨みしまゝ吉田もろとも座に着けば、
 待ち受けて滿面の微笑を浮べし主人夫婦、

「少々遅かつたね、端書は今朝、着いた筈だが、しかし別に大した急用でも無いから、
 時に上田、はゝゝゝえらい失策を仕出來したさうだな、また吉田も近來それがため、
 ますく、苦樂相半の妙な境目に懊惱してるとのことツたが、委細こゝに注進した奴が
 あるよ、はゝゝゝ」

「上田さんも吉田さんも其後は暫時、お目にかゝりませんでしたが、ほゝゝゝ、勿論、
 今日に限ツて是非とも何か、お土産を戴ける筈に心得て居りますが、ほゝゝゝ」
 上田まづ腸を刺さるゝ如き苦笑ひの顔色、

「いやはや今に始めぬ由來の鈍物、竟に愚鈍の極を呈して申譯の無い大失策をやらか
 した、加之も其大失策を其まゝ吉田の頭上へ浴せかけて、生涯さらに一言の無い理
 由だ」

「なアに皆これ意外の點から不意に起ツた出來事で、自然かういふ結果に立至ツたん

ですよ、しかし其處に蟠居せらるゝ先生のやうに、人爲的の出來事で深切を盡され過ぎてても聊か閉口ですな」

「吉田、まア暫時、黙ッてる方が宜い、この上田が今に取纏めた一禮をするからね、實ア四五年來、よほど溜ッてるよ」

もはや面目玉を踏み潰して、苦し紛れの胸骨を据ゑながら、自暴腹より絞り出す黒田の體、

「まづ一矢、吉田に酬いるぞ、僕ア君に不足を受けるところか、正に感謝の念を以て迎へらるゝ筈に信じて居たんだ、嫌なら嫌で男らしく放棄が宜い、もし放棄なきやア結局、東よりするも西よりするも同じこつた、たゞ多少その間に時の都合と事の遅速あるのみで、どうせ君、あの跛躰を鼻アに持つんだらう、はゝゝゝさて二の矢は上田君、足下に捧げるが、たとひ四五年來の禮が溜ッてるにしても、今こゝで一時的

に取纏めて頂戴するには及ばない、いや實は戴きたくないから、どうか死際の總仕舞にして貰ひたい、元來この男、己むを得ない必要に迫ッて筆と舌とで戦ふ事は知ツてるが、かの十七八世紀時代に流行ツた腕力沙汰なるもの甚だ好ましく無いよ、はゝゝゝとところで最後は當家の一對に單刀直入、きけば端書で二人を呼び寄せたんぢやア無いか、それなら其事と前以て一言、ちよいと洩らしてくれるのが人情だ、そいつを意地悪く、わざと黙ッてさ、第一に細君の心意が解しかねるね、よし旦那殿が悪洒落にしろ、そこは内助の婦徳として、良人そりやア不可まセンとか何とかいふべきところだ、加之も人の狼狽を濟まし込んで平氣の御見物たア猶更ら以て大に其意を得ない、また今さら嫌に繼子根性を起して愚癡を並べるでも無いが、全體今日に限らず諸君は此黒田健次を好意的に迎へないで、常に一種の猜疑心を帯びた反抗的の觀察をするから、往々その間に感情の衝突を免れないんだ、しかし此方も

妻を持ちし上は従うて子もあるべき筈の道理、妻あり子ある上は従うて別に一家を持つべき筈の道理、既に一家を保ち妻子を養ふ上は従うて勢ひ書生の境涯を脱し去るべき筈の道理、そもくこの吉田雄藏が今こゝに一家の主人となり妻の良人となり子の父となりて、世の中より米鹽の料を得んとすれば、いかに前途の志望は堅く生來の品性を保たんとするも、また従うて多少の行路を轉じつゝ人格の變化を來すべき筈の道理、さては幸か不幸か、運命の神が祕密の函に藏せる一生の窮達消長、あけて二十六の曉鴉一聲に含まれぬ、

花車

いまだ妻持たぬ當世男、十七人、いづれも年齢は二十一二より三十前後の徒輩が、ある席に打集ひて四方山の浮世話に飽きたる後、いざや雨夜ならねど聽て添ふべき女の品定めせんとて、座の中央に一個の函を置き、おのゝ胸に思ふ女の佛を書き付けて投げ入れぬ、

函の中に集りし十七枚の文は、この席の十七人が神に祈り心に念じて、人間生涯の快樂は唯この妻にありとまで思へる未來の夫人、いづれ天女を欺き花に似たるの美人ならんが、さて美人にも、さまざまの嗜好あり、いろゝの希望ありとて、年長の一人すすみ出でて満座を見渡しながら、憚る顔色も無く聲朗かに讀み上げぬ、もとより番號は事の善惡に係らず物の優劣に關せず、たゞ十七枚のうち手にあたるを先として、を

りしも其席の評者に呼ばれたるは浪六ないりり、

◇第一番

年のころは十八九、色白の丸顔には富士額の毛際さえわたり、薄絹に紅を包める如き頬の艶うるはしく、眉は三日月形、目は黒目がちの愛敬こほれて、口元り、しう閉ぢながら笑へば白き齒の一二枚に満面の嬉しさを宿らせ、しかも身の扱ひ細かにして言葉の端に物足らぬところ無く、何事にも情ふかうて世上の挨拶に行き渡り、雨の夜さては風の夜の淋しき折柄は、人知れぬ一室に良人と差對うて、おほえある遊藝の一手に徒然を慰むる道も乏しからず、かつまた家に客ある時は其座に出でて聊かの脱落なう、一を聞いて十を悟る心利きたるを妻に持ちたし、

浪六これを評していふ、

これは所謂る當世ぶりの才女、繁華の巷に生れて中以下の家に育ちしものに多けれ

ば、得るに難からねど、さて得し上は良人たるもの須らく仔細に注意して怠るべからず、何となれば、二十歳を越さぬ女の身として物の扱ひ浮世の限々に行き渡り、かつは愛敬專一に人を外さぬ言葉を盡すのみか、良人の徒然を遊藝に慰め、客の席にまかり出でて取持萬端に脱落なしといふ、この希望に叶ふ程の者、もし一步を誤らば、これ進んで牛を賣り損ふ才女なるべく退いては舅姑に一理窟いひたけの利者なるべし、また斯る才女の常とて、良人の弱味を見抜く目先するどければ自然に我意募りて、飽くことを知らず、めしつかふ奴僕下婢なども絶えず引替へ差變へて朝夕に追ひ廻す口しければ、家に入出入の男女にも際立ちたる敵味方を拵へ、善悪ともに世上の批評とりく喧騒しかるべし、ましてこの良人たるもの一朝おちぶれて家傾くの非運に逢はゞ、この妻かならず味噌粥さけて末の末まで涙の憂に伴ふ貞女なりや、いと覺束なし、第一かゝる女の二十歳近くまでも清淨無垢の處女に

てあらんは、まことに今の世の稀有にて、兩親の膝下に未通氣を粧ふころより俳優
 などの沙汰に闇からざるのみか、用も無きに近所合壁を蓮葉あるきして、年齢に
 過ぎたる身の馴れやう才の發けやう、はや其所この若き男の意中に宿して目遣お
 だやかならねば、いづれ媚きし風聞の一つ二つは身に覺えあるほどの者なるべし、
 さればまづ歴然たる人の妻として家を治め子を育てんよりは、花柳の里に藝を賣り
 色を鬻ぎて持て囃さるゝか、但しは時めく紳士の愛妾となつて物見遊山に日を暮す
 こそ性來に叶ひし身柄なれ、凡て此類の者は學者官人、さては物堅き商人の娘は妙
 く、名高き料理屋船宿待合など一代の華著全盛を銜ふものゝ娘に多し、されど斯
 女に二分の文字を與へて三分の溫雅と柔順とを加へなば、交際場裡の花となつて家
 を興し良人を扶くるの良妻たるも難からざるべし、

◇第二番

月は軒より出でて軒に入る大都會の當世生育よりは、蟲の音しけき片田舎に生れ
 て、舊の庄屋あるは土地の郷士豪農などの娘こそ好ましかれ、年齢は固より十六
 と二十歳までの間にして、都の手振に疎けれど女の業に一通り缺けたること無く、
 容貌は絶群の美形ならずとも十人並に劣らぬをもて限とし、さて嫁して後は、いよ
 いよ物しづかに萬事の謹慎ふかく、見馴れぬ客ある時は奥の一室に遁け入りて我身
 の鄙びたるを恥づるが如く、朝夕たゞ良人と舅姑にのみ優しう情らしう頼り頼り
 て、なまり言葉ほつくと物拾ふが如く幼き時の有様ななどを語りつゝ、いつまで
 も浮世の下司馴れぬ眞實の色を持ち添へて、子を生めば、また其子に従ひ、生涯おの
 が好惡を現し得ぬほどの妻ぞ欲しかれ、

浪六これを評していふ、

これはまた第一番に打ッて變りし要害堅固の希望かな、人によりては斯る女を妻に

持つこと宛がら石佛を抱いて寝るに等しいはんが、さて七人の敵よりも油断ならぬ浮世の諺、もしこの娘を好んで妻にせば良人たるもの生涯安樂なるべし、されど茲に一事の氣遣はしきは、まゝならぬ人生の榮枯盛衰、激しく寄せ來つて、良人もし思はぬ災厄に身を落し家を破るか、但しは生涯の希望を半途に棄て、死せし不幸の後、親を残され子を遺されし浮世さまぐの苦勞を凌いで、よく一家の亂離敗類を憂目の中に守るの才氣ありや否や、浪六君そこちや、親里が田舎氣質の豪農なんとして見捨つべきとは、たとひ心の底に萬一を望むの計たりとも、ゆめさらく決して口に宣ふべからず、かくては天晴の男振ずんと下りて賤しき卑劣の名を唄はるのみか、女房を人質に取つて餘所の巾着を覘ふの毀譏をまぬがれざるべし、

◇第三番

我は試みに華族の姫様を貰はんと冀ふものなり、しかも新華族は嫌なり公家華族は

蟲が好かず、ならば大名華族のうち、公侯は位過ぎて實なく子男はまた少々お手輕にて希望に叶はず、まづ有徳の名聞ある伯田の令嬢にして、むづかしき大殿すでに世を去り母御は猶ましませども凡て別荘住居、今の當主は我貰ふべき姫様の兄君、これまた取も直さず兄弟の縁を結んで萬事に便利なるのみならず、さて妻とすべき本尊の年ごろは十五か十六、勝頼を慕うた八重垣姫の蓮葉氣を取つて雲雀山に籠つた中將姫（但し佛臭きところを抜く）の優しみを添へ、恐れながら傳へき衣通姫の御美貌に合はして、錦の床に浮世の風も知らず現世に生まれ出でし玲瓏無垢の名玉、五月や菖蒲桔梗かるかや小櫻などいふ腰元衆に取巻かれて、みづからが何とやら斯うとやら唯譯もなき風情の中に、天の生せる氣高き色艶を含んで良人たる我を大切にし、明けても暮れても連れ添ひ付き纏はるゝ心持あゝ果して如何ぞや、ええ堪らぬ、

浪六いはく、

苟も人間の生涯を契るべき大禮の妻定めに、何事ぞや試みに貫ひたしといふの一言
すでに道を外れ倫を破るのみか、よしや假寓の戯事にせよ、平生利慾の念に他人の
富貴を羨めばこそ斯る白痴たる希望もすれ、赤裸百貴と唄はれて手足を伸ばせば忽
ち心のまゝなる男の身として、なんぞ俄に及びなき雲を望んで苦しまんや、たゞこ
れ財寶の奴隸、たゞこれ肉體の獸慾、そのむかし下宿屋の片隅に燒芋を嚙んで描き
し妄想いまだ胸に蟠るか、さあれ餘所の榮華に眼眩んで轉寐の夢に見し面影か、評
に及ばず論ずるに足らず、あはれ草叢に彷徨うて野犬の糞を掴まざる用心が肝要な
り、

◇第四番

腹立たしき時には、じつと胸に堪へて怒り得ざれども、悲しき時には身も浮くばかり

忍び音に泣く女ぞ床しけれ、

浪六これを評していふ、

その美醜賢愚をいはず、また家の貴賤貧富にも及ばず、唯怒りを忍べども悲しみを
忍び得ざる女ほしけれとは、諸も言葉の簡にして意味の深さよ、これを望むの人、
もし或は曾て女學生の活潑伶俐なる束髪に懲りて今は純然たる女大學流を冀ふに
あらざるか、

◇第五番

顔の色ちよいと淺黒くともよし、たゞ頸首くつきりと白く雪を欺いて、羽二重肌の
瘦肉ながら骨たぬ地藏肩、黒漆のやうなる髪の毛の解かば身丈にも餘らんほどな
るを、我から持て餘して、うるさけに引き結びたる風情をかしく、日尻や、釣りて男
まさりの濃き眉に剃刃かけし痕もなう、鼻筋とほりて口元に何とやらん聞かぬ氣の

色、さりとして物数ははず、いはゞ急所をついて態とならぬ人殺しの文句も出で、手足すつと伸びて身の運び慌たゞしからず、かつ二十歳の上を三年四年さては五年の今日までも、心の叶ふ男なくて世に許さぬ花一輪ピンと拗ねし中年増、されば物ごし浮世に馴れて取扱ひ人に後れねど、しんじつ神ぞ嬉しい事には顔さつと赧むる優しみを底に含んで、晴の衣裳にも綺羅を飾らで袖ほどの重ね裾を好み、つねの着類に木綿を粧へど額裏の絹赤地つけて、のりかゝる意気地の張には身を忘れ、ひきうくる心の宿には富貴も目に入らず、しかも縫針の業に長け、世間普通の讀書に劣らず、すべての事は世話女房に未通氣持たせて名ある遊女の俵を添へ、さてまた懐しう凜凜しき皮肉もて包んだる女に冊かれたし、

浪六これを評していふ、

あはれ事むづかしの仰せかな、才子時に遭はず勇士知己を得ずして草の葉がくれに

朗吟するが如き面影を、そのまゝ浮世の女にうつして作り出したらんかと思はるゝ節あり、まづこの所望について言はゞ、義のために死をも甘んずる俠客者流が秘蔵の一女らしく、また傳へきく江戸氣質の藏前の札差などが落魄れて昔の榮華を夢に見ながら育てし娘にもあらんか、但しはこれ、やんごとなき御方が歌妓に生まれし女の流石に父を憚り母に従うて世の片蔭に忍ぶ風情ならんか、いづれにしても當世に得易らかぬ尤物、顔色に出さず口に言はねど心の底には我ひとり高く思ひあがりて、ほどばしる才氣じつと胸に押へつゝ、冷かなる眼に市井巷閭の男を卑しめ、易くは沽らぬ額越に時めく風雲の富貴を軽んじて、たゞこれ情の一點にのみ脆く優しき女なれば、かゝる女の良人たるは今の世に何人ならんか、市に利を逐ふの商人は固より嫌ふべく、肥馬輕車に乗る官人にもあらざるべく、さては一藝一能もて世に用ひらるゝ士にもあらず、世上の風波を巧みに漕いで衆に羨まるゝ才子にもあ

らず、學者、醫者、美術家、發明家、僧侶、軍人、政黨員、新聞記者、辯護士、製造會社の利物、銀行などの大株主、これ等もまた心に叶はざるべし、されば、もし斯女に慕はれて百年を契るほどの男振りかならんと想像すれば、いまだ家をなさざる有爲の書生にして前途に慥なる大望を抱く男、しかも男より所望されず我より進んで其業を扶けし後に良人と定むるか、あるは世に惜しまるゝ名士こゝに滿腔の不平を鳴らして片田舎に閉ち籠り、しづかに身を養ひ風月を伴とする奇矯豪骨の人に添ひたかるべし、さて妻となりての後は如何、妻としては固より馨しき令閨、夫婦の情愛に己が全身の才氣を忘れて、唯これ溫雅貞淑の婦女なれども、もし人倫の變に逢はゞ忽ち猛然として殆ど狂し、一步を踏み損ねし曉は白刃を閃かす怖ろしの女たらんか、

◇第六番

縁あれば如何なる女にも添ひ遂げ申すべく候

浪六これを評していふ、

嗚呼いはれたるかな、さても面白う言はれたるかな、これ飽くまで情海の波瀾を見渡して人事の任意ならぬを觀するの言、浪六これに對して兎角の評なし、たゞ君が心を思へば松ふく風に琴の音しのぶが如く、君が身を思へば水の清きに月おちて碎くるが如し、願はくば圓滿無闕の婦女を得て君が百年の幸福を祈る、

◇第七番

富貴ならずとも職業の卑しからざる家庭に育つこと第一、父母の系統とも數代の間に精神病さては遺傳病なきこと第二、高尚なる才學なくとも今日普通の女子教育に缺けざること第三、外に出でて優美の才藻に乏しくとも内に坐して一家の經營に巧みなること第四、たとひ花顏柳腰の語に叶はずとも身體健全にして骨格皮膚の逞し

きこと第五、みづから手を下さずとも庖厨の業に長けたること第六、天生の堪忍力を有すること第七、習慣の善良を損ねざること第八、すべて他人の感情を害せざること第九、まづこゝに以上九個の希望に漏れずして二十三歳のころまで品行方正なる婦女を得たし、

浪六これを評していふ、

名を棄て、實を取るは古人も難しとするところ、ましてや今人の輕薄なる唯その花を喜んで殆ど狂せる中に、卓然この希望を抱くもの幾何かある、これ美人を得んよりは寧ろ良妻を得んとし、妻を得んよりは亦むしろ子を得んとするにあり、君乞ふ安んぜよ、正にこれ豪傑を生むの母なり、

◇第八番

予は生涯さらに妻を娶らざるの決心なり、されどかの學者達が哲學上より割り出し

たる無妻主義にあらず、また一種の理想家が厭世の腦裡より産み出したる無妻主義にもあらず、たゞ我みづから我を奈何ともする能はざる天生嗜好の便宜上より起りし無妻主義なり、故に人間としては必ず夫婦相伴ふべきの本分も知り、いはゆる一家團樂の快樂も未だ得ざれど正に確信するの一人、固より美人を見て愛すべきの念もあり、これが情愛の人事七分を占むるの理も、たしかに奉じて更に疑はざれども、予が現世に出でて父母の名を知ると共に起り、予が就學の期を得て校に上りしと共に長じ、竟に予が志の門外に走せて社會の事物に接し處世風浪の難きを認むると共に、こゝに驀然として自ら禁ずる能はざるものあり、何ぞや、曰く旅なり、あゝ旅なるかな、天外萬里の客となつて五尺の身を高山大川の間に放ち、耳目を各國の風俗に注ぎ習慣の異同に投じて、僅々たる人生の小を漠々たる世界のみに消磨し盡さんとするの遠遊にあり、もしそれ骨を埋むる地の如きは殊に青山を擇ばず、往

いて身み作たるれば心こころともに竭つきて空くうに歸きするのみ、何なんぞ身しん後ごの榮えいを欲ほつし墓ぼ前ぜんの弔てう慰ゐを待またんや、胸むねに一卷くわんの歴史れきしを繕ひもといて到いたるところに盛せい衰すい興こう亡ぼうの跡あとをたづね、心こころに萬ばん斛こくの自由じゆうを抱いだいて東とう西せい南なん北ぼくに偉ゐ人じん俊しゆん傑けつの門もんを叩たたき、喜き怒ど哀あい樂らくを恣ほしにして進しん退たい動どう止しを外が物ぶつに煩わづらはされず、唯ただこれ飄へう々くとして遊あそぶもの、故ゆゑにまた詩し人じんとなつて世よに唄うたふの責せめなく、書しょを著あらして後こう世せいを益えきするの任にんなく、再またび親しん戚せき故こ舊きうに逢あつて語かたるの念ねんなく、富ふう貴き利り達たつこゝに捨すて、芥あくたの如ごとし、されどこの宿しゆく志しを果はさんとすれば之これに應お答たするの旅りょ費ひなかるべからず、即すなはち此この旅りょ費ひを得えんがため日にち夜や孜し々しとして尺せき蠖くわくの屈くつに倣ならふこと七しち年ねん、なほ三年ねんを經けい過くわせば或あるは志し望ぼうを果はすに難かたからず、況いはんや故こ國こくに家いえを成なして妻つを娶めとり子こを生うむが如ごときは、今いますでに社しゃ會かい中ちゆう等とうの上うへに衣い食しょくするの餘よ裕ゆうあれども、予よが天てん生せいの斯この嗜しやう好かうに供きやうするがため七ねん年ねん井せい蛙わを學まなんで貯たくはへたる財ざいを妻さい子しに頒わかつ能あたはざるのみか、たとひ倍はい數すうの富とみを得えて之これに與あたふるの幸かう福ふくありとするも、天てん外ぐわい萬ばん里りの客きやくとなつて生しやう涯がい

を終おるべき予よに伴ともふの婦ふ女にょ、そもく今日こんにちの世せ間けんにありや否いなや、これまた假かりにありとも、固もととり王わう侯こうの旅たびにあらず富ふう貴きの遊いうにあらざるの予よが、異い域ぎくの寒かん暑しよを踏ふんで妻つの骨ほねを晒さらすに忍しのびざるなり、是これに於おいて萬ばんやむを得えざるの無む妻さい主しゆ義ぎとなれり、一い個この婦ふ人じんを戀れん愛あいせんよりは寧じしろ天てん下かの山さん川せんに獻けん身しん的てきの戀れん愛あいを以もつて接せつ吻ぶんせんとするものなり、浪なみ六くわん君くん、乞こふ予よを痴ち笑せう痛つう罵ばして情じやうを解かいせざるの木ぼく強きやう漢かんとなす勿なれ、たゞ予よが性せいとして此この快くわいの彼かの快くわいに及およばざるを奈いかん何んせん、

浪なみ六くわんこれを読よむこと數すう番ばん、さらに瞑めい目もくしていふ、
 そもく父母ふぼありて生うれ出いでし人にん間けんが、後のちに得えたる學がく問もんの理り論ろん上じやうより起おこりし無む妻さい主しゆ義ぎなれば、我われまた之これに對たいして飽あくまで争あらそふの議ぎ論ろんあれども、奈いかん何んせん、たゞ單たんに此この快くわいの彼かの快くわいに及およばざるの天てん性せいとして、事ことの便べん宜ぎ上じやうより萬ばん已やむを得えざるの無む妻さい主しゆ義ぎ、これを責せむるの法はふ律りつなく、これを壓あつするの學がく理りなく、またこれを害がいするの力ちからなし、いは

んや墳墓の地を捨て、故國の念に薄きの小事もしくば愛國愛郷の念に乏しきの故を以て茲に君を論ぜざるべし、乞ふ君さらに進んで大に往き、往いて壯に驍々たる其志を逞しうせよ、人間もとこれ天地の一粟粒、外に晒すべき君が一片の枯骨は内に守るべき我國一撮の土を減ぜざるべし、

◇第九番

もとは由緒ある有徳の數にも唄はれしが、いつしか浮世の風に誘はれて、さしもの榮華も昔の夢となりつゝ、さめて残るは家の形見の定紋のみなるを、母なる人いたく憂ひて病の床に臥せしほどもなう、啼くは一聲ほとゝぎす、こゝにも血を吐く悲歎を良人や我子に引かされながら、返らぬ黄泉の旅に出でしは七年前、さて後は父が男の馴れぬ世帯に叶はじとて、やがて後添の妻を迎へしが、これぞ世にいふ繼母の手に育ちたる一人娘、さらぬも哀れいぢらしの世の中に、かなしや去歳の軒端に秋

風たつころ、その父にさへ後れて残る身一個を何とせん、なさぬ母子の淺ましさを、娘は母を慕へど母は娘を思はぬにや、かりそめの言葉にも打叩かんばかりに罵られ朝夕の給事にも下婢の如く追ひ使はれて、餘所の見目も涙の種となりつゝ、照る日も曇る憂目さんぐの中にも、持つて生まれし天の美形は花菖蒲、はや十七といふ露や珠玉なす妙齡に、まゝしき母のいと無情さ、よき婿とつて亡人の回向せんとは思ひもせで、人喰ふ鬼と語らひつゝ、賣色の里に賣らんとぞいふ、おそろしの景色きのふ今日ならねば、果は現に責め口説いて、逃るゝ道もなきの涙の淵瀬に落され、所詮うかばぬ身の因果、しらぬ浮世に汚されて苦しの恥辱を晒さんより、死して冥途の父母へ縋り逢はんの一念に、我を忘れて家を抜け出で、をりしも空には更け行く冬の月高く、下には流るゝ水の音冴えて、我を呼ぶかや小夜の千鳥の聲さへも、身に染む橋の袂の霜を踏みつゝ、小石拾うて欄干に打凭れ、おもはず振り仰ぐ

眼には涙の一時雨、口のうちには南無阿彌陀佛、この曉は流れていづこの岸に倚るやらん、あすは世上の口の端に何と亡名を唄はれん、されば今死ぬる身にも恥づかしの容貌風俗、帯しめなほし裾うちあはせ、雪の額にふりかゝる黒漆の前髪かきあけて、戀しの父上、なつかしの母様、導き給へや待ち給へと念じつゝ、さすが現世のなごり後世のたのみ、思へば淺き一期の苔の花を、嵐も待たで我から急がんと、合掌念佛こゝに身を躍らし、あはやと見ゆる背後より、惜しや勿體なや待ったくと聲かけて抱き止めしは何者ぞ、誰にもあらず斯くいふ拙者なりけり、拙者この娘を抱き止めて仔細を聞き、おもはず月の光りに顔を見れば、ことしの春、櫻狩の歸途に見初めし娘、娘また拙者を嫌ふどころか、元來の美男なる上、眼前に生命を救はれし恩人、深夜に餘所の人影なけれど互に恥ぢらふ風情よろしく、あやしの縁とか何とか憂苦の中に三分ばかりの嬉しみあつて、そのまゝ家に連れ歸り、さて改めて妻に持た

し、また悪婆ながら掌中の珠玉を失ひし彼の繼母には、拙者より賣身の金子を與へて母子の縁を切り、これにて四方めでたしくの大團圓、
浪六これを評していふ、

これは小説家の許に食客せしほどの人物相應なる所望なり、しかも陳腐なる凡俗小説家の寫字生か或は校正兼小使に備はれ、主人不在の節は臺所に藻潜り込んで殘杯冷肴の舌鼓うちながら、房相あたりより罷り出でたる下女を捉へて揚々たる大氣焔を吐き、あはよくば、これを提けて落人筋を演ぜんとする男が、霜夜の寢覺に主人夫婦が喃々を聞いて起せし妄想なるべし、されど斯の如き可憐の境涯に陥る婦女なきにあらねば、よろしく腰辨當をつけて夜なく八百八町の橋上を尋ねまはるべし、但し巡査に見咎められざるの用心肝要なり、

予は常に我より數等の上に位せる婦女を冀ふものなり、たとひ形體は天下第一の醜
たりとも、性質、學力、知識、藝能、守操、品位、系統、すべての點に於て我眼底
より高尚を占むるの婦女たれば、正に全身の愛をあけて之を喜び之を敬しつゝ生涯
を契るべし、論者或はいふ、妻として夫に過ぎたるは竟に一家の圓滿を缺くの恐あ
りと、予の説に曰く、これ未だ其一を知つて其二を知らざるの言なり、凡そ世の妻
たる者が其夫に勝るの故を以て閨門の治らざるは、これ妻女が勝れたるにあらずし
て妻女に附帶せる一部、もしくは妻女が嫁すると共に父母より得たる條件の勝れた
るのみ、就中系統の高きと財力の強きと美貌の稀なるを以て勝るもの世間に多きが
ため、凡流の女は自ら明りに高く尊大にして、動もすれば其夫を見ること婦道の外
に逸するものありと雖も、もしこゝに總ての高尚なる點、言を換へていはゞ、女た
るものが嫁して守るべき本分の美性を有したらんには、その夫に勝れたる點なんの

害かあらん、むしろ却つて夫を扶け夫を勵まし更に夫を娛しましむる大なる理由に
して、人間無上の快樂と共に天の成せる伉儷の賜を全うすべし、然るを世上の男子
また多く之を忌むものは、心すでに妻を娶るにあらずして婦女を弄ばんとするが故
なり、婦女を弄せんとするの不徳をもて苟も我に過ぎたるの妻に對す、閨門の治ら
ざるは固より其分にして怪しむに足らざるなり、蓋し思ふに今日の夫たるもの、み
だりに男尊女卑の弊を極めて己より妻の高きを終身の恥辱となし、妻また之に従ふ
をもて人生最後の不幸となし、兩々ともに相背き相戻りて常に解けざるがため、殆
ど神よりも清き男女の愛をして汚れたる人爲の競争場裡に投じ、遂には言ふに忍
びざるの不倫を演じて、朝に合するもの夕に離るゝも人さらに疑はず甚しきは昨日
の夫妻今日の途上に逢うて顧みざるのみか、互に其影を罵り其弱點をあけて敵視す
るに至る、噫これを思へは寧ろ獸類の期を定めて孳尾するに如かざるなり、故に曰

く、予は必ず我に過ぎたるの妻を娶りて、その我に勝れたるものを我全身の愛に融
化し、以て夫妻ともに天の許せるかぎり人間の及ぶかぎり、あくまで伉儷の快樂を
取らんとするものなり、

浪六評していふ、

これ西洋より來れる戀愛神聖の説を取つて、直ちに東洋今日の男尊女卑を喝破せん
とするに似たり、論ずるところ世上夫妻の多くは信にあらずして偽なるを慷慨し、
竟にはその獸慾に歸するを憤るのあまり、殊更に我より勝れたる萬能の妻を得て之
を一片の愛情に融和し、以て伉儷の快美を遂げんとするにあり、まことに志の皎
皎として清きこと玲瓏たる珠玉に等しけれど、たゞ恐る、果して言行一致の美德を
當世に得べきや否や、君にして之を爲すの美德ありとするも、君に伴ふの天女に似
たる婦女ありや否や、なほ一步を進めて問へば、かくの所説これを西洋の書に見る

を得れども、實に悉く西洋の夫妻に見るを得るや否や、もしそれ單に西洋にあり
とすれば東洋また古今その美談に尠からず、要するに愛は神聖にして且つ無邊廣大
なれば、人事の萬端をあけて一に包含すべしといふ、其極いはゆる獻身的の愛にし
て、匹夫匹婦の癡情に迫つて死するもの亦これ君が一唱三歎を得べきか、乞ふ善惡
を社會の極端に求めずして大觀の上より打算せよ、或は君が慷慨悲憤の念を減する
に足るべし、然りと雖も、人情紙の如きの今日、この熱腸を抱いて我まづ遂げんと
するの士また果して幾何かある、語に曰く、中らずと雖も遠からず達せずと雖も近
づくを得べしと、願はくは好丈夫さらに益々自愛せよ、

◇第十一番

拜啓、小生は元來の不文にて思ふ十分一も筆にいたし候事相叶はず候へども、か
かる面白き席上に小生一人相漏れ候も何とやらん無念のやうに心得候まゝ、こゝ

に少々ばかり相陳べ候、憚りながら御判讀下さるべく候、さて前後より皆様の御注文いろく、拜承いたし候へば、いづれも後來に天晴御所望の段々、たゞ感服の外なく、また御たのしみの程も羨ましう存じ候へども、小生のみは既に妻めいたる一人の女を持て餘して、よせば善かつた舌切雀とやら、ちよいと舐めたが身の詰りと相成り、どのみちとも今さら此女の離別いたし候事は所詮出来難き義理しがらみも御坐候故、申さば未來の希望は絶えて無之者に御坐候、あはれ御憫察可被降候、さりながら皆様の御注文は畢竟するに來年の天氣豫報と同様にて、たとひ斯様の女をと佛神かけて御執心遊ばされ候とも、人間業の任意ならぬ縁談に御坐候へば、果して御所望通りにまゐり候や、このところ甚だ覺束なく存じ候、さて其段に至りては不束女ながら既に得て友白髪までと契り候小生こそ、もはや左様の懸念もなく心丈夫に御坐候まゝ、御参考のため、多年さまぐの艱難に逢ひながら猶ほ今日までも

小生に付き纏ひ居り候彼が容貌氣質身分等を、こゝに委細申し上げ候、そもく彼が父は舊幕臣にて三千石近き知行をいたゞき、旗本ながら何の守といはれ、一時は御側御用人にも出頭せしほどの身柄に御坐候へども、榮枯盛衰の世上とて、維新後は何事も昔の夢と諦め、向島小梅の寮に引き籠り、たゞ風流三昧に晩年を樂しみ居り候處、元來の富有に眼を注ぐ奸毒の徒輩あつて、只管ら外國貿易の利潤多きを説き、一は國家の御ためなどと唆し、竟に横濱まで引き出して、さんぐ姦謀の穴に押し落とし候へば、二三代は其まゝ安樂に坐食も出来候ほどの家財を、わづか五六年の間に悉く押し潰され、諺にいふ士族の商法、始めて目の覺め候節は奸物いづれも遁け去つて最早や萬事の手後れと相成り、やうく残るは横濱の本宅と小梅の寮ばかり、今更の後悔なんの詮も無之候へば、本宅を三千餘圓の捨價に賣り拂うて其金子を生命の綱とたのみ、再び小梅へ引き移り候節は明治七年の夏とやら、其年

の秋に生れし女子は即ち唯今小生の妻めいたる女にて、名を田鶴と申し候。田鶴が父の相果て候は三歳のころにて、いまだ東西の分別もなき身を母の手一個に抱か、母子の外には下女と下男、主従あはせて四人の暮しに御坐候へども、わづか三千餘圓の金子いつまでか其まゝに御坐候べき、その上に母なる人は、これもまた昔の榮華生育にて、眼前に饑渴の相迫り候までは奥様氣質に其日を送り、家事一切を召仕の者に打任せ候やうの始末に御坐候へば、脊門の朝霜が日に逢ふ如く、じわくと消え失せて、田鶴が八九歳のころは既にまた小梅の住居も人手に渡り、あはれや今は門前の作男に貸せし草長屋に引き移り、奉公人にも暇を取らせて後は母子唯二人の詫住居と相成り候、さてかく相成り候うては、これまで出入せし舊臣の徒輩も寄り付かず、猶をりく心易く来るものは古河の絶えぬ雫を吸ふ曲物ばかりにて、果は衣類小道具までも、風呂敷一枚を翼の鳶商人に搔き攫はれ、門口うかゞふ

鷹の目の屑屋に踏み倒され、竟には其身の皮まで剥ぐ淺ましき、此まゝ二年も経たば母子乾物とも相成り候ほどの境涯に落ち入り候處、其ころ鄰家に住居いたし候ものは小生の一家に御坐候、勿論小生の家も餘裕あるべき身分に無之候へども、父母ともに健全にて少々の貯財も所持いたし、まづ無事に暮し居り候上、父は元來の俠氣にて、世の成行とは申しながら歴々の衆が斯くまで落ち果て候母子を氣の毒に思ひ、なにくれと親切に世話いたし候甲斐もなく、張り詰めし氣の弛みてや、母なる人は臆て病死の後に、あはれ残りし孤兒は田鶴にて、此時やうく十三歳の少女に御坐候、されば小生の父も愈々不憐さ彌増りて今は餘所事とも得捨てず、ともかくも田鶴を我家に引取り、偕その後親戚を取調べ聞き出して家の形見の田鶴が手を引きつ、普く尋ねまはり候處、町人の成果とは違ひ、時めしき武家の一旦落ち果てしものは安外の脆さにて、いづれの親類も同じ落魄、たまくと相應に暮し居り候

もの二三軒はありし由に御坐候へども、利慾のために他人の少女を世話するかのやうにいはれて小生の父も憤懣いたし、さらば眼前の合力は頼み申さぬ間、この娘が年頃となつて縁につくまで、一族の情誼に月々四圓三圓また一圓にても、お心次第の積金を御手許に貯へ置き下さるべく、其間は私方にて女一通りの恥辱なきやう育て、一文半通の謝禮も受けず立派に返しまるらせんとまで、申し残して其ま、泣き入る田鶴を連れ歸りし後は、殆ど我家の娘同然にて、小生は此時十六歳、田鶴より四歳の兄分に御坐候、されば小生と田鶴とは、ふりわけ髪とやら申すべき間柄にて妹と呼び兄と呼ばれて、育ち候うち、小生の父母も相尋いで世を去り、家産また衰へて詮方もなく相成り候ころ、田鶴は十六歳にて小生は十九歳に御坐候故、及ばずながら二人ともぐく相談いたし、わづかの遺産を親戚に預け候上、せめて其金子の盡きんまでもと、小生は是まで通り高等中學に通ひ、田鶴は人の世話にて去る伯

爵の華族家に侍女奉公と相成り、元來は他人ながら朝夕兄弟同様に暮せしものが茲に一朝相離れ候當時の心中御推察可被下候、さて後は小生も限りある些少の學資にて不自由勝に通學いたし候事故、他人の一時間は我一日分と心得て懸命に勉強いたし、田鶴もまた奉公大事に勤め候よし、をりくくの文通にも申し越し候うち、小生の高等中學を卒業いたし候節は、親族にあづけし學資も盡き候始末にて、この上は大學の所望も水の泡と相成り、折角の志學半途に捨て、先づ一身衣食の事に奔走すべき無念さを、かねて田鶴が覺悟いたし居り候ものか、此時すでに勤めし二年餘の給金その他不時の頂戴物など、悉く身に染めて一物一文も費さず貯へ居り候金子が八十餘圓、頂戴の品は兄の許に保存いたさせ置きますると稱へて、小生が手許に運び越し候上、賣り拂ひし髪粧飾衣裳の類が凡そ百圓あまり、合はせて二百圓の金子まづこれにて學問し給へ、其うちには時機を見合はせて御主人様に事情を打明け

妾が生涯書入の給金をお借り申して、天晴れ御志を遂げさせませうと言ひ置き、其儘また別れて屋敷へまゐり候時は、田鶴が十八歳の秋にて、面影いぢらしう心根ふびんに存じ、小生も人知れぬ涙をこぼし申し候、それよりは小生の心頭さらに一段奮勵いたし、大學中にも常に優等の位置を相占め候ほどに御坐候處、不幸にも翌年の夏、これといふ不養生も不致、かつ人間の病も多き中に天か命か、忌はしき虎列刺病に取れ付かれて避病院へ擔ぎ込まるゝ身と相成り候、されば平生の朋友知己は更なり親戚の者にさへ、かゝる折から不知顔に打捨てらるゝ心細さ、業いまだ成らずして病骨を晒すの慥やるかたなく、所詮のこと助かるまじと我ながら瞑目觀念いたし居り候處、これを聞き付けて人々の諫止もきかず屋敷を飛び出し、狂氣の如く其身を忘れて駈け來しものは田鶴に御坐候、かく申さば異なる様に相聞え候へども、必ず死すべき小生の運命を助けしものは、醫師の手柄にあらず藥石の效にあらず、たゞ十九歳に相成り候田鶴が一念、天に通じたる故と確信いたし居り候、さりながら、これがため屋敷は不首尾と相成り、再び奉公も叶はざる場合に立至り候故、やむを得ず田鶴を引き連れて本郷駒込の奥に棟割長屋の一軒を借り受け、やうやう雨露を凌いで其日の細き炊煙を相立て候あはれなる境涯の委細は、いたづらに田鶴が當世あるまじき貞操節義を自慢いたし候やうに相當り、小生もまた赤貧苦學の間に業を遂げし吹聴と相成り候へば、わざと茲に大略いたし候へども、滿三年間の二人が有様、いかにして相暮し候やら、その邊は萬事に御苦勞人の浪六様、よろしく御察し可被下候、さて最後に少々ばかり田鶴が容貌氣質等を申し上げ候、彼は今年二十四歳にて、勿論絶世の美人と申すほどには無之候へども、とにかく小生の妻としては勿體なき過分の姿色を備へ、その氣質は唯なんの仔細もなく、あはれや凡夫の小生を神のやうに思ひ込み居り候事實は、既往に照らして聊か疑も御

ず、たゞ十九歳に相成り候田鶴が一念、天に通じたる故と確信いたし居り候、さりながら、これがため屋敷は不首尾と相成り、再び奉公も叶はざる場合に立至り候故、やむを得ず田鶴を引き連れて本郷駒込の奥に棟割長屋の一軒を借り受け、やうやう雨露を凌いで其日の細き炊煙を相立て候あはれなる境涯の委細は、いたづらに田鶴が當世あるまじき貞操節義を自慢いたし候やうに相當り、小生もまた赤貧苦學の間に業を遂げし吹聴と相成り候へば、わざと茲に大略いたし候へども、滿三年間の二人が有様、いかにして相暮し候やら、その邊は萬事に御苦勞人の浪六様、よろしく御察し可被下候、さて最後に少々ばかり田鶴が容貌氣質等を申し上げ候、彼は今年二十四歳にて、勿論絶世の美人と申すほどには無之候へども、とにかく小生の妻としては勿體なき過分の姿色を備へ、その氣質は唯なんの仔細もなく、あはれや凡夫の小生を神のやうに思ひ込み居り候事實は、既往に照らして聊か疑も御

無坐候むざなくさぶらふ

浪六これに對していふ、

仰せの委細いち／＼具さに會得仕り候へば、御關係の深さ御情愛の厚さ、何かの物の本にも相見え候やうにて、御うらやましき程の儀に存じ候、わけて田鶴子さまには、いまだ御目にかゝらず候へども、御様子といひ御氣性といひ、春の朧月夜に梅が香匂ふ心地して、他人の拙者まで御なつかしう思ひまゐらせ候、然るを御書面の冒頭に、よせば善かつた舌切雀ちよいと舐めたが身のつまりと、はしたなき卑俗の小唄を御記入遊ばされしは、全體いかなる思召に御坐候や、この席の諸氏に對して御謙遜の意ならば、外に何とか御工夫の書振も可有之に、わざ／＼かゝる卑しき駄洒落を以て、かりそめにも斯る貞節の令閨に當てられ候事、ちと御料簡違ひかと存じ候、もし田鶴子さまが此一文を御覽なされ候は、いかに溫淑玉の如き御性

分にもせよ、甚だ御氣の毒のやう考へ候、申すまでも無之候へども、糟糠の妻は堂を下さずとやら、なほさら千代に八千代の末までも御大切に遊ばさるべく念じ上げ候、

◇第十二番

容貌の美醜は目に見て知り、品行の善惡また探りて知るを得れども、たゞ無形の性質、わけて人の妻となりて後の性質は、いまだ嫁せざる以前の教育と家庭によりて悉く窺ふべからざるのみか、婦人の嫁期は恰も武者の戰場に出づるが如く、平生の素養をあけて勝敗強弱たゞ此刹那にかゝり、生涯またあるまじき心身變動の一大機運なれば、一朝これを迎へて百年の禍福を賭せんとする男子の注意、たとひ力を極めて選擇取捨いたらざるなきも、既に成長せる昨日の他人を呼んで忽ち今日の異體同心となすもの、前途その危きを思へば宛がら薄氷を踏んで千仞の水を渡るの感

あり故に人間萬事小心翼々たる我は、たゞ卑賤ならざるものゝ子にて年のころ十歳前後より十三四歳までの愛らしき少女數人を養ひ、五年間これを我左右に置いて思ふがまゝの教育習慣を施し、他日その中より我意に叶へる満全の良妻を得たし、何となれば、凡そ世の女子たるもの、おのゝ生まれながらの資性天賦ありと雖も、多くは破瓜に近づくころ外部の色相によりて定まるものなれば、まづ春情の萌すまでは方圓の器に従ふ水の如く、たゞ無色透明にして長者の力よくこれを支配し得べきのみならず、彼等また我を師傅の如く敬ひ我を父母の如く慕ひ、形影相伴うて朝夕相親しみ、無意無識の間おのづから年と共に綿々たる一團の愛情を生ぜん、されば其愛情の發達するを待つて期に投じ妻となす、固より道路の男女相逢うて終身を契るが如きものにあらずして、百年偕老の良妻を得るの日に、また才色兩全の阿妹數人を世に出し、ともに長く往來して親戚故舊の觀を子孫に遺すの快望あり、

故にいふ、我の妻を娶るは妻として娶るにあらずして、いまに情を解せざる可憐の少女を得るにあるなり、

浪六これを評していふ、

男子生涯の禍福を分つべき妻を娶るに、昨日道路の他人を迎へて忽ち今日の異體同心となす、前途その危きを思へば實に寒心すべきものありといふ、固より理は理なれども事實に於て已むなきを奈何せん、これ或は世の女子を見ること頗る重きに過ぎて寧ろ夫妻の情を輕んずること却つて甚しきの言にあらざるか、人を殺すの毒婦も戀を歎く能はずと、君乞ふ、夫妻間中一夜の魔力は門外十年の過去を拂うて痕跡なきものと信ぜよ、たとひ世上の事實に照らして悉く斯の如く信ずべからざるも、もしこの信を取つて物を容るゝの量なくんば、一朝おのれが意に叶ふの良妻を得ると雖も、人事の不幸こゝに胚胎して忽ち初志と違ひ、竟には君が寒心するところよ

り更に大なる不快を生ずべし、蓋し君の如き數學的の性を以て漠々たる此世上に對せば、獨り婦人に於て危懼の念を抱くべきのみならず、男子の交際に於ても日夜その心を疑ひ色を窺うて終身朋友知己を得るの期なく、父子兄弟また互に狐疑して竟に和氣霽々たる一家團樂の時節を得ざるべし、かりに一步を譲つて君が希望の如く數人の少女を愛育して他日その良を擇ぶとするも、その良順なるもの果して君が生涯の良順たるべきや、試みに翻つて君が心事を判断せよ、朝に思ふところは夕に違ひ、今日の是は明日の非となりて、我みづから我心の頼みなきに驚くの憾あらん、かつまた人間徳義の上より之を見れば、竟に娶るところの婦女は一人なるも、既に娶らんとするの妻女數人を貯ふるに等しく、君が所謂小心翼々の性として心に疚しきところのなきか、たとひ數年の教育を施して間然なき恩義の阿妹を出すとするも、この阿妹もし他に嫁して君が當時の眞意を解せば、久しく心身の試験に逢うて

一朝その選擇に漏れたるの感情、果して長く子孫往來の慇懃を保つべきや否や、思ふて茲に至れば君は却つてこれ大膽狡智の人、おのれ一身の便を得んがため叨りに罪なき世上の少女數人を擽にして其不幸を犠牲に供するが如し、何となれば、君を以て柳下惠を許すものにあらずんば、朝夕室を同じうして嫁期すでに迫るの君が阿妹を乞うて喜ぶの男子あらんや、蓋し一人の妻を娶るに豫め數人の女子を養ひ竟に餘れるを放つて平然たる君が心は、正に他日その妻を代ふること亦さらに履を脱ぐが如く易かるべし、こゝに於て君がために一策を獻ず、他なし、身みづから數人を養うて此敗徳を譏られ此損失を招かんよりは、むしろ女學校の教員となつて日々數百人の少女に接し、親しく之を教へ之を試み之を窺ひ、竟に其中より意中の人を掠めて妻とすると共に、一片の辭表その職を捨て、責を塞ぐに知かざるなり、

◇第十三番

沈魚落雁、閉月羞花、嬋姮婀娜、窈窕楚々、さては高尚優美、淑德溫雅、才色兩全、傾國の麗質、絶世の尤物、乃至また藤たけて妙じき姿、みる目もまばゆき風情、花はづかしき姿、優にやさしき性質、世に越え人に立優りて氣高き有様、ゆかしき振舞、なつかしき面影などいふ、すべて斯るむづかしき文字もて評せらるゝ女よりのは、たゞ尋常に娘らしき娘が嫁となりて、誰が眼にも女房らしき女房といはるゝ外は、善惡ともに他人の口の端にかゝらぬほどの妻を持ちたし、されば嫁せざる以前に親まさりの才女と賞めらるゝ風聞も入らぬこと、學校に通ひて優等生と稱せらるゝ賞状も入らぬこと、また嫁して後は良人を扶けて家を興すほどの智慧も入らぬこと、子を生んで其子の行末を目に見る如く指圖するほどの分別も入らぬこと、まして朝夕出入の者に情らしき言葉を掛け力を貸し恩を施し、あるひは親戚一族の席に出でて仔細らしき嘴を容るゝ世話沙汰は猶更の禁物、老いては婆らしき婆となり、

死しては亡跡に際立ちて惜しまるゝ形見もなく傳へて譏らるゝ不覺もなく、残るものは世にありし己が名のみ、しかも其名は生みの親につけられ、連れ添ふ良人に呼ばれ、我子が人に問はれし時に答ふるのみの名にて、善いとも悪いとも更に一言の批判めいたる肩書の添はぬ名を持ちて、生涯なんの音もなく色もなく香もなく、唯しづかに我分を守りて現世を過すまでの妻を得たし、

浪六これを評していふ、

うまれし名の外は生涯なんの仕出かす業もなく、たゞ平々凡々たる世間普通の女子に似たれど、大人は愚なるが如しといへる諺より、その深意のあるところを窺うて、まことに斯の如き妻女ありとせば、これぞ絶世の淑德、圓滿の貞節、むしろ天下の賢女なるべきか、されば見渡す世に上いたるところに得易きが如きも、その實は却つて名聲噴々たる閨秀を求むるよりも難かるべし、たゞ平生の希望を茲に致すの人に

して始めて斯る婦女を擇ぶの明あるべく、婦女また斯る良人を冀ふの良縁を知るべく、互に圓なる意氣の通じて一朝相逢ふの美を祈るのみ、

◇第十四番

私は此席に於て前途多望の意氣揚々たる諸君と共に、他日良妻を得るの希望を申し上げるよりは、むしろこゝに一場の懺悔物語、これとて私が殊更に犯した罪では御坐いませぬと、不幸にして斯の始末、諺に申す通り恥をいはねば理の聞えぬ仔細、即ち私は二十一年より今年三十歳までの間に、前後あはせて六人の妻を持ちながら其六人の妻に悉く捨てられた淺ましい果敢ないもので御坐います、言を換へていはゞ、六人の妻に捨てられたと申さうより、私は夫婦相愛する人生最大の快樂を神より奪はれて、かくの如き苦痛煩悶を此世に受くるかと、人知れぬ夜なく、または寢覺勝の曉などには、冷かに淋しき空房に枕を擁して、獨り涙に沈むほどの境

涯で御坐います、故に今こゝで私が打明けて諸君に訴ふる心事を、もしや一片あはれむところありと思召さば、せめてそれを身の面目と心得、また不幸中の幸とも思つて満足いたします、さて私は元來越後三條の生産で父祖代々土地に知られた富豪の家に育ち、自分の事を申すは異なれども、幼少より學校に通ふころも常に其級の首座を占め、やゝ長じて後は一郷の才子と呼ばれ、身體も無病健全、兄弟も多數あつて末子に生れた幸ひは、國を去つて四方に遊學するも心のまゝながら、さて田舎氣質の風習として父母親戚はこれを好まず、もはや年頃うかくと浮いて流れぬ礎にとて、二十一の春、否應なしの押附業に始めて妻を持たされました、その妻は十八にて名を梅と申し、これも近郷に聞えた舊家の娘で、容貌は私に過ぎたほどの美人、女の業にも十人並すぐれて、都の人の眼からは草叢の珠玉、いづこに一點の瑕瑾なければ、父母兄弟は固より一家一門の者まで騒ぎたて、現在の私も流石に嬉し

からぬ筈なく、こゝに目出たく祝言の式をあけて、友朋輩の間にも羨まれ、近所合
 壁の茶飲談話にも噂され、一月二月は夢うつ、たゞ夫婦の情愛は斯くまで樂しき
 ものかと、をりくは我ひとりで我身の恥づかしい心地して暮すうち、その年の夏、
 わすれもせぬ孟蘭盆の日、妻の梅が墓参のため親里へ歸りたいといふに、それ善か
 ろ、さうなくては叶はぬこと、さらばとて思ふがまゝの衣裳髪飾具を作らせ、里へ
 の土産やら知邊への贈物やら、天晴れ美事に行届いた音物を持たせて、平生から隔
 意のない下女を付け、出入の車夫に送らせたところ、下女と車夫は其日に歸れど、
 妻は二日といふ約束の日に戻らず、さりとて慌て、問ひ合はすも呵しく、また迎ひ
 の者を遣るも極立ちて好まねば、我ひとり知らず顔に打過ぎしうち、二日三日四日
 五日六日、もはや一週間の逗留に何に音沙汰もないは、第一里方の親が等閑の至り
 とて、私の兄が自から出向いたところ、いやはや案外の大騒動、妻の梅女は私方へ嫁

する以前より、かねて言ひ交した忍び男があつて、その男と共に出奔したを、親々
 が申譯なさに狂氣の如く日夜八方へ手分して搜索最中とのこと、私も初めて驚き、
 無念やまく骨髄に徹したれど、さて今更に致方ないのみか、さほど性根の腐ッ
 た淫奔女、たとひ捜し出して血證文一札を添ふるとも、此方から嫌ぢや離縁ぢや、
 さらりと去つた、まづ持参の荷物を數あらためて受取れと、荒繩に引ツからけて大
 八車に積み返した後は、私も男の意地づく、汚された面の泥の乾かぬうちに、おの
 れやれ百倍まさる女を貰うて、いづれ末は後悔の梅女が成果を見返しくれんと、越
 後蒲原郡の一圓に草の根掘ツて穿鑿したところ、幸ひ加茂といふ土地に家は近ごろ
 少々不首尾なれど、やはり元は大家の血統、しかも娘は十九にて名を常といひ、萬
 事が世にいふ天の名せる容色で、みめ姿なら心の氣立なら、どこに兎の毛の申分
 なく、これまで四方よりの縁談は雨の降るほどなれど、親が昔氣質の一徹に、今こ

そ斯く落魄れたれど筋目なき男には得遣らぬと、さしかさず傘の骨あくまで硬うて飛沫にも濡らさぬ秘藏娘のよしを聞くや否、人橋かけて黄金にあかし、衣裳手道具すべて拵へ取に迎へたは其年の秋、結句おもへば鱒を猫に取られて鯛の返禮うけたも同然、きのふまで胸間に蟠つた不快の塊物すつと消え、つぶされし男の一分こゝに立って、身も心に更に新なる思ひ、我ばかり秋の空に春めいて、いづこの里に何として居るやら夢になりともこの睦じさを前妻に知らせたいと、過ぎし無念を笑うて寢物語に喜び勇んだ甲斐もなく、唯今おもひ出すさへ涙の種、いはゞ私のために一期の恥辱を雪いでくれたのみか、なほ行末の幸福を守るべき二度目の此妻が、その冬の十二月、ふと風の心地というた言葉が疾病の基で、浴びるほどの醫藥も更に何の效なく、翌年の三月、花の咲く現世を見残して其身まづ夜半の嵐に散りました、運命とはいひながら二十歳の年弱、添うた月日は僅に半歳、これには流石の私も人

間の無常を觀じて、そのまゝ佛道にも入りかねまじき氣色を、一家親類の者に諫められ、やうく心取直して諦めたものゝ、さて其年の夏となれば、まためぐりくる孟蘭盆に、わすれもせぬ去年の今日、むらくと思ひ出す眼前の怨恨につけて、ことしの新魂を迎ふ身が猶更かなしく、なつかしい面影、ゆかしい姿、目にちらついで遣る方もない歎きの果は、何事も面白からず鬱々として暮すうち、それが積り積りツて竟に一種の神經病を惹き起しました、かく申せば、女々しい奴と定めて諸君が一場の御笑草ながら、實に私は二度目の妻を失うた爲に病氣となりました、即ち二度目の妻は私を病人とするほどの愛情風采を備へて居つた女で御坐います、すでに病人となつて新潟の或病院へ入院したところ、その病室をあづかる看護婦に、容貌こそ四半分も届かねど、同じ名の常として二十一の深切女、規則外に優しい介抱せられて見れば、なんとなく聲音までが肖たやうに思はれ、諸事行渡つた眞實の情を受

けては、いよく他人でもないやうの心地、餘所ながら身の素性を聞けば、猶更ら捨て兼ねる哀れの境涯で、両親も同胞もない獨者の、さて嫁入せんには支度なく、婿を取らうにも家はなく、さりとて下女奉公に生涯うかぶ瀬はなく、何か女子相應の小商せうにも資本なければ、せめて難からぬ一個の業を覚えて、其身の過すだけの世渡りに有附かんと、二年以前この病院へ看護婦の見習に傭はれ、今年の春やうやう一人前となつたよし、きけば聞くほど哀れを増し、見れば見るほど心の正直も現れて、容色からいへば世間ありあまる普通の女子ながら、氣立からいへば百人に一人も乏しい掘出物、このまゝ藥臭い病院に埋めて、わづかの給料に名も知らぬ他人の膿血を介抱さするは惜しいものと思つた一念が竟に縁の端となり、退院の後、竊に人を遣つて迎へ取らせたが、これぞ即ち二度目の妻で御坐います、されど當分は世間の手前もあり、かつ父母親戚に對しても入院中の看護婦といはるゝが恥づかし

く、また打明けて頼むとも、氏素性の分らぬ女子は所詮のこと、差控へ、三條の町外れに人知れず住はせて、をりく通ふうちも、決して二度目の妻が事を得忘れませぬ、忘れねども既に死んだ女、今更なんと致方もないといふ諦めが、同じ名の此女によつて心を慰め此女の陰陽なき眞實に羈されて、去るもの日に疎いとやら、いつしか薄らいで、現在の愛情に厚くなつた折しも、突然この女が警察署へ拘引せられ、つゞいて私も参考のため招喚せられた時は、事の意外に膽つぶれて夢かとばかりの驚愕も、さて仔細を聞いて猶更の一驚、腰の骨の抜けぬが我ながら不思議と思ひました、全體この女は、新潟の赤鬼といはるゝ破戸漢の妹で、殊勝氣の看護婦となつたは世を欺く淺黄頭巾、ぬぎとれば兄に劣らぬ恐しい大膽女、入院者を深切ごかしに油断させて、俗にいふ枕さがし、これまで屢々おかした竊盜の罪惡も平生の質正直に誰とて怪しむものなく、却つて外の看護婦小使などに疑念かゝり、この女ひと

りは評判ますく善かつたところ、天網疎にして漏れずとは斯ることをいふものか
 流石の毒婦も入院者の私に引取らるゝを憚って、事情もいはず行先も届けず其まゝ
 ほつと俄に辭職した廉が、忽ち一時に嫌疑の種となり、段々それより探偵の手に掛
 けて竟に舊惡露現、また私方へは固より眞實の縁を求むる心でなく、全く財産を覘
 うて兄と共に後日の一狂言せう爲であつたと警察官より聞いた時の私は、たゞ惘然
 として開いた口の塞ぎやうなく、魂魄引抜かれた心地して脱殻の五體ふらくと家
 に歸れば、父母を始め親戚一同が四方より取り巻いて烈火の如き憤怒の形相、今更
 に一言の申譯なく、穴あらば消え入りたいほどの面目なさ、齒を喰ひ縛つて油汗
 に總身を濡らせど、いはゞ身から出た錆、悔いて返らぬ生涯の失策と謝するの外は
 涙ばかりが胸の萬分一、たゞ私が親泣かせの不幸者となり前代未聞の白癡となつて
 濟むものゝ、儲すまぬは世間の取沙汰、あれを見よ、わづか一年あまりの間に三度

も妻を持つて、しかも最初は情夫に掠はれ、二度目は半年たゝぬうちに死なれて吼
 面かわき、三度目が何事ぢや、廣い世界に女の數もあらうものを、わざ／＼新瀉三
 界から枕さがしの盗女を引き連れて来て、あたり舊家の軒に末代とれぬ泥を塗り
 をつた大馬鹿者、今度が見物ぢや、四度目は何を妻に持ち居らう、馬の骨か牛の骨
 か但しは狗猫の皮か、おほかた二度目の嫁が死骸を掘り出して夜なく抱き付くで
 あらうと、かくまで一郷の物笑ひとなつた曉は、どの顔さけて生れ故郷の大道を歩
 かるべき、もはや安閑として此まゝ家に居られず、よし庚申塚の猿を學んで辛抱す
 るにせよ、第一が父母兄弟の恥辱、つゞいて一家親類の名折、所詮いたしかたな
 しと思ひきり、まづ一年衣食の料に父が手より三千圓を貰ひ、母が涙と兄弟の涙に
 送られて、親類の者へも挨拶なく、朋友知己にも隠れて、たゞ一人飄然と東京へ出
 たは恰も私が二十四の春で御坐いました、さて東京へ来て見れば諸事萬端また田

舎とは雲泥の差で、申さば籠の鳥の雲井に放たれた心地、今まで井の底の蛙であつた身が呵しうて、俄に目も冴え手足も伸びたやうに思ひ、一月二月と馴れるにつけて考ふれば、一年餘の間に三人の女房持った位は何の仔細なく、賣色の身ながら吉原には一夜に十人の男と連れ添ふ女さへあると、妙なところに理窟をつけて、故郷の空を冷かに笑ひ、顧みれば何事も夢一場、いはゆる百聞は一見に知かざるの道理で、こゝに翻然として悟り、いや悟るといふほどの立派な私でも御坐いませぬが、まづ過去を忘れて將來を思ふだけの覺悟を起し、ある法律學校へ入學して、二箇年の間は一心不亂の勉強、其後は獨學一年、あはせて僅三年の修業ながら、おそらくは他人の十年に劣らぬと自から信じた甲斐あつて、二十七の時、辯護士の試験に第一の優等を占めました、さて斯うなると故郷の名聞も次第に善く、父母は猶更ら私を天下の大學者にでもなつた様に心得、かねて私が分配を受くべき財産の三分一即ち

五千圓の金を携へて上京し、これで先づ一家の始末をせよ、もはや田舎に歸つて住む氣はあるまいと、萬事行届いた親の慈悲に私も後來の目的などを打明け、こゝに始めて東京で辯護士の一人となりました、かつ幸ひに私は、外の新參辯護士と等しく朝夕奔走して訴訟を捜し、日夜駈け廻つて權利義務に聲を濁らさずとも、過分の豪奢さへせねば衣食の道に事缺かぬ故、いはゞ遊樂半面白半分、看板の手前で、來るだけの仕事をするにも、別段謝儀報酬の多寡をいはず、偏に依頼人の便宜のみを計つて何事も深切一方に扱ひ、もし敗訴せば實費の半を償ふといふ、この風聞はツと一時に廣まって以來は、私を保險附の辯護士と譚名して、來るわく、案外の繁昌、俄に目の舞ふ忙しさ、逆も私一人で手が届かねば、同じ試験に及第しながら猶ほ門戸を張り得ぬ下宿屋住居の辯護士數人を雇ひ、館内に嚴正の規則を設けて大に事務を擴張したところ、これも幸ひに敗訴の數が少く、ために収入は豫定の上

に出づるといふ有様、そこで私も少々先生振って、遊びが半分の職業が竟に本氣の沙汰となり、一二年の間に名聲噴々たる一個の紳士となりました、しかし私は此時までも妻といふものに一種の不快なる觀念を抱いて、諸方の申込を悉く跳ね付け、生涯獨身の覺悟で居りましたもの、さて實際今日の身となつて見れば、その必要いよく迫つて、無妻は世間の信用にも關するほどの次第に立至り、萬やむを得ず或人の周旋にまかして迎へたは、さる醫者の娘で名を梶といひ年は二十二、容色は十人並を勝れて、随分教育もあり才氣もあり、妻としての外聞は至極の上々、わけて交際多き家の妻には尤も適當なれど、唯こゝに一事の遺憾は、他人に聞かせられぬ大缺點、即ち良人たる私としては生涯連れ添うて相和することの出来ぬ次第、いはゞ私は媒妁人と親里と本人とに欺かれた如き者となつて、此度こそはと神にいのり心に信じて迎へた四度目の此妻が、悲しい哉、却つて私に人知れぬ不快と苦痛と

を與へる種となりました、されどこの不快と苦痛とは妻が好んで與へるでなく、妻みづからも日夜なけいて恥づるのあまり、その缺點を身の品行で補はんとする哀れの風情、いぢらしの心根を思ひやれば、俄に追ひ出すことも叶はず、私は所詮この妻といふ人生第一の快樂を得られぬ不幸の者と諦め、其まゝ一年ばかりを過すうち、さすがに妻も其身の淺ましき缺點と私に對する氣の毒さに、迎も平然として居堪らぬ故か、一日、一通の書を殘して親里に遁け歸つた後、さらに姿を見せませぬ、かつ其遺書中には、あくまで身の非運を歎いて、第一に私を欺いた罪を謝し、第二には、忽ち追ひ出さるゝかと思ひの外、私が一年間これを忍んで連れ添うた無量の大量の恩を喜び、第三には、其恩によつて迎も叶はぬ女子の道を踏み、人の妻となつて世間を糺ひ得た慈悲を呉々も言ひ、第四には、これより有髮の尼となつて生涯を送るといふ、實に昔の小説にでもありさうな哀れの遺書で御坐いました、されど此事を

知らぬ人は、たゞ妻が遁け歸つたといふばかり、むしろ私に何事か缺點のあるやう思はれて、實は心外に存じましたが、さてそれを打明けては折角の恩が仇となる道理、また遺書の文面を読んだ上は猶更ら口外なりがたく、其まゝ私に心一つに秘めて過ぎました、それがため梶の兩親は今なほ私方へ出入いたして無二の交際を結んで居ります、さて以上しめて私の持った妻は四人、いづれも皆かくの如き次第で、人爲と天爲の不幸に責められ、悉く伉儷の本分を殺がれた無念さに、まゝよ婦人の快は妻に限るものか、妻と定めて家に迎へばこそ、かゝる苦痛もすれと、こゝに初めて花柳の巷を思ひ、新橋柳橋さては其他の遊里に日夜沈酔して、あるまゝの金銭を瓦礫の如く摺み出せば、思ふまゝの美人は皆これ我妻妾、たとひ娼婦歌妓に眞實なしと雖も、私は固より其信實を取つて終身の伴とすべき必要もなく希望もなく、たゞ世上の物價より見れば少々高いと思ふのみ、元來黄金次第の賣物買物と心得て

萬事を眼前の觀に貪り百年を一夜の情に籠むれば、結局これが私の本色となつて、却つて淡泊の名を尤海大波の間に唄はれ、竟には花街章臺の先達、いはゆる通様となりました、しかしこの通様そのまゝの通様で飽くまで押せば立派なれど、奈何せん凡夫、わけて私は凡夫中の凡夫で、いつしか一人の歌妓と深くなり、迷はじとするほど迷ふは斯道、溺れじとするほど沈むは此淵瀬、退くに退かれぬ場合となつて、また懲りずまに宿の妻といたしました、藝名は小染、本名は高、年は二十四で、恥づかしながら五度目の妻で御坐います、されど私が、これを妻としたには聊か仔細あることで、むしろ情愛一筋の素人よりも理解一方の藝者氣質こそ、物事さばけて萬端の會得も早く、現つて行末互の爲ならんと思ひ込んでは、是また大の失策で、諺にいふ如く、やはり野におけ蓮華草、手に取つては案外の黑白、きのふの是は忽ち今日の非となつて、三月もたゝぬうちに早や後悔の聲を漏らせば、妻また敢て屈せず、

さんぐ、私に不平の色を現して、お去らば去らばの挨拶も軽く、其まゝ手荷物ひッからけて何處ともなく、つっぱしりました、しかし私が以上五人のうちで、つっぱした此女が却つて憎くもなく惜しくもなく、恩仇ともに絶えて胸間に残らぬだけが、せめて私のために、僥倖と思ひます、また最後に迎へた六人目の妻は、良人に死なれて七年の間みごとに後家を立抜き、女の手一つで立派に當世を渡つたのみか、しかも良人の遺産を倍にしたといふ逸物、しかし年は私より十三も姉に當つて秋の野末の枯尾花、もはや額の小皺の寄つた婆なれど、全體が右の如き働きもので、あらゆる辛酸も嘗めつくし、さまざまの経験にも富んで、妾おきたくば置けといふ寛大の個條まで先觸して來たほどの女ゆゑ、見外は見苦しい不似合の夫婦なれど、内證の眞實は甘露の如く、日夜の扱ひは痒いところへ手の届く心地して、私を弟の如く思ひ子の如く愛し、私もまた或時は母の如く馴れ慕うて、世間で笑はれなが

ら互の間は水も漏らさず、一家圓滿、諸事整肅、春情を保つの期が短い代りには閨門亂れて人に譏らるゝ憂なく、相携へて兄弟と誤らるゝ事はありとも、互に和して一言の争ひを起すことなし、是に於て私も始めて夫妻の完全、否これも他人には決して完全ならずとも、かく不幸うちつゝいて殆ど人間の快樂を失うた私に取つては、所謂飢うるもの食を擇ばずで、まことに嬉しく満足いたしました、しかしこの満足もまた不運の私には到底長く宿らぬものと見え、六度目の此妻、女ながら身も心も鐵で作つた様な丈夫の此妻、きけば四十一の今日まで風邪一度ひいたことのない此妻が、不思議や昨年五月ころりと病んで歿した時には、もはや私も決然として斷念しました、猛然として人事第一の快樂を自暴自棄いたしました、即ち私には妻といふものを天より與へられぬ前世の大罪人、こゝに再び人間となつて形體を保つばかりと信じました、取も直さず、身體健全に社會中等の位置を占めて衣食住

に事缺かぬ私なれど、人間としては家もなく智もなき野末の非人乞食より遙に劣つた淺ましい者で御坐います、あはれみ給へ諸君、畜類蟲魚に至るまで相伴うて樂しげに生活するものを人間の私一人が其快樂を神より奪はれた不幸の者で御坐います、されば此後なほ強ひて妻を迎ふる事ありとも、その妻は必ず天に悪まれ神の憤怒に觸れて、いはゞ私の生涯を取纏ふべき不幸否運の犠牲となる道理、罪なき世上の女子に私の不幸を願つても同じ事で、いよく妻といふものを斷念しました上は、こゝにまた親子といふ人事最後の娛樂も殺ぎ取られた私で御坐います、子孫の希望までも絶えた私で御坐います、勿論、たゞ一片の春情を果すのみならば金銭を以て自由なれど、それは少壯血氣に前後ない時か、但しは庭前の花に飽いて路傍の楊柳に戯むるゝ時のこと、いやしくも家を成し世に立つて歳三十を越ゆる身に、迎ふべき妻は門外の往來織るが如くありながら、さて一人これを迎へて終身相伴ふことの出来

ぬ私が、雨肅々たる夕、風颯々たる曉、また夜ふけ人定まつて萬頼寂寞たる後、往事を歎き將來を思へば、空房に冷かなる枕を擁して如何なる悲痛慘澹を心にうくるか、せめて之を此席の諸君に訴へて、他日諸君がめでたく迎へらるゝ令閨に對し、かりにも壓制的の言行なきことを祈ります、及ぶかぎりの情愛を以て長く閨門の厚からんことを祈ります、

浪六これに對していふ、

段々の御述懐を承つては、たゞ君が心中を察するばかり、失禮ながら、浮世の挨拶通り御氣の毒と申し上げる外は、このところ更に兎角の評も致しかねます、しかし、任意ならぬが人生の常として大觀すれば、また敢て君が如く天を恨み神を怖れて身を抛つにもあたらす、さほど落膽失望せらるゝほどの事でもあるまいかと考へます、なるほど、わづか數年の間に六人の妻を持つといふが既に男子たるものゝ

最大不幸、しかも其六人の妻が悉く完全からで、一年も無事に連れ添ふことの叶はぬといふに至つては重ねぐの御非運、人知れぬ苦痛慘澹の程も御察し申せど、偕これが強ち君の罪でなく君が招いた業でもなく、いはゞ風に誘はれて梢の實を失ふ晩秋の柿、ほとりと音はすれども自然の成行、え、是非もないと、たゞ諦めるより外に致し方もないと存じます、勿論その諦めるは既往にあつて、前途さらに寸毫の支障ともならぬ筈を、わざと自暴自棄して我から身を殺すに似たる御料簡は、かの羹に懲りて冷水を吹くの比譬、責太鼓の遠音に驚いて早まつて自害するも同然、あまり男らしうもない臆病、わけて辯護士といふ法律氣質の君には案外の弱音と存じます、かく申せば、浪六は妻といふものを水瓶の檜杓同様に心得居るかとの御疑念もあらんが、元來その六人を君が妻と思へばこそ、もしこれを門外道路の婦人と見る曉は何とで御坐りませう、姦通する奴は憎い、事なきに去る女は白癡、死ぬ

る女は可哀想と思ふばかり、敢て君が前途を抹殺するほどの力ない證據は、日々の新聞雜報を御覽なされる時に、世間あらゆる夫妻の醜聞痴話もしくは喧嘩沙汰離縁さわぎに血を流すとも、殆ど君が半日の不快すら繋ぎ得ますまい、しかし斯くいふは殊更ら君に對うての言、もし餘人に逢はゞ却つて君が如く情事に脆い臆病者を譽めまする、つまり人生は何事も心一個の業、その自殺主義は切に御諫め申すと共に、既往六人の不運を一時に埋め合はすほどの令閨、いはゞ君がため偏に細君の大器晩成を祈ります、

◇第十五番

猿にも衣裳、馬士にも綺羅、わけて女は髪風采、うまれし身の外に紅粉を施して男の目を掠むる業に長けたれば、男たるもの大に警戒すべく、いやしくも油断して買ひ過ぎざるの用心專一とすべきに、多くは蘭麝の匂ひを美人の肌より漏るゝものと

心得、冢に似たる女房を抱いて珠玉と思ふの徒輩あるがため、さらぬも横着なる世上の女どもも、自ら高く止りて、勿體なや六尺の男を見ること小猫一疋を扱ふよりも與みし易しとなし、日夜鏡に對うて世を欺かんとするの手段いよく深く、果は一笑よく國を傾け城を仆し家庫を潰すの勢ひあるのみか、しかも其性の強情陰險にして、糞勘忍の強き證據には、古今の戀に女より口説いて仕掛けたる凡例は尠く、多くは男子をして人知れぬ涙に轉輾苦惱せしめ、甚だしきは己れ先づ惚れて置いて死に瀕するも猶かつ口を開かず、わづかに平生親密なる乳母や召使の推量に依つて三年の戀情を現しながら、かくても恥づかしいとて顔を赤め袖に隠れて兜を脱がぬ度胸の太さは、實に呆れたる沙汰の限りならずや、まして人の妻となつて後の振舞に至つては、さらに一段の言語道斷、白晝は何事にも拗ねて思はせぶりの色を粧ひ、夜に入れば目を斜めにして恩義がましき様子を銜ひ、内證の不首尾をも思はずして唯

おのれが一身の綺羅を飾らんとし、良人の不機嫌にも容赦なく物見遊山の日取を數へて、身の分際も顧みず、刃に餘所の榮華を羨み、不幸でもなき不幸を歎いて動もすれば親里に遁け歸らんとするの勢ひを示し、また或時は不埒にも俳優の錦繪と良人の面相を見比べて及ばぬ事に面くらすのみか、これを愛すれば忽然びらりしやらりと附け上り、これを吐れば忽然べそくと泣き出し、打てば忽然きやツツと騒ぎたて、え、面倒と殺せば忽ち化けて出る厄介物、およそ世上の始末に困るといふは蓋し女のことなるべし、されば聖人これを養ひ難しと宣ひ、佛者これを外面如菩薩内心如夜叉と説き、先達の士これを曲物と叫び、經驗ある老爺は身を削るの斧といふ、故に男子の妻を娶るは生涯の大役にして、いは、此世の苦を求むるに等しく、親の娘を持つは三界の首柵にして、盜賊も七人の女子ある門を窺はずといふほどの難物なれば、そもく、いかにして之を扱ふべきや、數年以來の日夜千思萬考し

て竟に一の計略を得たり、されど今こゝにこの計略を示せば、たとひ席上の諸君に
 秘密を守るの信ありとするも、反間苦肉の計に妙を得て飽まで執念ぶかき世上の女
 ども、必ず諸君を欺いて聞き出すのみならず、忽ち防禦の策を講じて我數年の苦心
 も水の泡となるの恐れあれば、殊更に言はされども、もし我と感を同じうするの士
 は、明夜竊に我宿に來訪せらるべし、四隣閤として燈火しづかに牝猫も居らざる一
 室に額を鳩めて語るべし、

浪六これを評していふ、

いかに婦人を責むればとて、これは餘りに甚だしき過言ならずや、かつ終身伉儷の妻
 を扱ふに、數年の苦心より案じ出せし一の秘計を以てするに至つては、殆ど猛獸を家
 に飼ふと等しく、さながら敵と席を同じうして坐するが如く、酷もまた酷ならずや、
 されど言ふところの一端を徐ろに味へば、固より一理なきにもあらざるの言にして

君はこれ曾て婦人のために苦しめられたるの人ならんか、さなくば假令之を度しが
 たきの難物とするも、かくまでの罵詈を極めて斯くまでの警戒はせざるべく、また
 斯くまでの怨恨がましき言を吐いて一味同心の者を求めざるべし、かつ君が言ふと
 ころを考ふるに、これ中流以下の規律なき家庭に育ちし氣儘女か、但しは無教育の
 蓮葉女が野合より成り立ちし妻のため、さんく後悔の臍を嚙んで腹立たしさのあ
 まり、玉石混合ともに焼討の復讐と思ふべき色あり、そもく僻目か、僻目にもせ
 よ、いやしくも君が如き心をもて婦人に對せば、いづれの婦人が君のために貞操な
 るべきや、いはゆる君がいふところの難物いよく難物となつて、むしろ敵に計
 を教ふると等しく、竟には君が天晴の神算鬼謀も用をなさざるに至るべし、されば
 君がため切に乞ふ、希はくは徳をもて仇に報ゆるの人となれ、わけて妻には己が満
 腹の眞實をもて之に感化せしむるの良人となれ、畢竟するに女は男よりも智慮分別

の淺きものと觀念せよ、決して君が思ふ如き怖ろしの大膽を備ふるものにあらざるなり。

◇第十六番

年のころは十七八、瘦せもせず肥えもせぬ中肉中脊の羽二重肌ほつてりとして、たとひ身の折屈みにも角たぬ五體の節々は神前に備へたる小餅の如く、手足の爪端にまで天生の才氣みちくながら、さて何處やらにまだ鹽ふまぬ幼氣を含んで、すつと立つたる姿を背後より見れば、けに無垢清淨の滑かなる珠玉かや、満身の白さに一しほ際立つは黒々と取揚けし髪の艶、牙え渡る襟首のあたりに三本脚の毛際みどりを帯びて、右と左に流れ落つる肩の上には小鳥の足も這るべく、眞綿を糸もて押へしが如きは脊筋の小溝にて、總身の恥づかしさを籠めたる臀の肉肥は、たゞ見る雪を束ねて美事に合はずとも所詮およばぬ神の手際、小股きりゝと絞りがかりて張

切る皮に兎の毛の弛緩もなく、歩まば響く内股のあたり無心に動いて、立てる兩脚の踵は打合へども折重ならぬ自然の運び、これを美人の蓮歩とやいふらん、さてまた前面より見上ぐれば、これぞ眞實の鬼拉ぐ體、まづ富士形の額口、あゝ老いては年波こゝに寄するかと勿體なく、やがて剃り落す眉を春の遠山霞とも見よ、あはれ願はくは此まゝ長く置きたしと萬人に惜しまれ、いきゝくと張り詰めし千兩の腫、もしや曇らば一滴の雫に床板を抜くの力ありと其身みづから知るや否や、古今の名畫が筆を揮うて寫すとも叶はぬ頬の色ほつと曙の薄櫻に似て、わづかに兩鬢の間より漏れ出づる耳朶の端に赤味を帯び、満面の位置を定むる鼻筋の尋常さ、寒紅を含まねど褪めぬ口元の愛らしさ、さても此中に舌あつて何を語るやらん、日に三度の飯を食む時は如何に動くやらん、その兩脇を挿む笑窪には男殺しの露を湛へて、額は弦月の一端を矯めたらんが如し、さて首差伸ばすとも筋たぬ咽喉を下りて、

かはいや行末な^{ゆくすゑ}の思を宿すべき胸の肉は、ふツくりと柔かう展べて、そもや春情つくころより生みの親にさへ手をかけさせぬ兩の乳房は、まだ色づかて小さく固く肌^{かた}に喰ひ付き、銀盤の上に墨の雫とも見るべき臍の^{へそ}上通り下通り、世にあるかぎり連れ添ふ良人の外は、生命に代へても守るべき一點の神扉^{しんび}ふかく閉して、かの久米の仙人が通を失ひし眞白の脛の上骨も、あるか無きかのやうに思はれつゝ、打揃へし足並の優しさ足袋ならば八文ばかり、たとへ二十歳を過ぎて子を産むとも、やうく八文三分を越えざらんか、すべての希望は以上に演べたる美はしの處女にあまり深からぬ學問を添へ、みぐるしからぬほどの衣裳を着せ、うまれ得たる姿の美に劣らぬほどの才と情を籠めて我妻に持ちたし、

浪六これを評していふ、

嗚呼さてもく穿たれたるかな、あはれ大膽に肉薄呐喊せられたるかな、古來天下

の畫伯も裸體美人は難しとするところ、されど君がこの裸體美人を讀んで細かに味へば、いはゆる今日の理想家が叨りに一片の架空より描き出すの模型にあらずして、まことに眼前かくの如き實物を寫されたるかと思ふ節あり、しかも詞を俗にして意を深くし文を省いて實を示し、巧に五體の急所いちく衝いて餘すところ無きのみか、これを背面より望んでは襟首と臀に力を用ひ、これを前面より望んでは頭上と爪端の配合を取り、胸のあたり、乳房の色どり、臍の形容、竟に一點の神扉ふかく閉して犯すべからずといふに至つては、拔山蓋世の英雄ふらくとして魂魄を失ひ鬼神また讀んでために泣くべし、されど斯る處女の裸體を斯くも細かに見んことは、そもく實際に於て得べき業なるや否や、まして此美に叶ふの才と情とを籠めて、いやしからぬ家庭に育ちたる清淨の裸體を、手に取る如く男子の熟視凝目に任すの處女ありや否や、是に於て浪六つらく思ふに、これ必ず君が夢にも忘るべからざ

る意中の人を、その下婢に賂ひ其下僕に贈物して、しばく湯殿の節穴を拜謝感泣せし後、さらに世上萬人の婦人より幾多の美片玉端を取來つて之に加へ、こゝに始めて一個の裸體美人を作り出せしなるべし、されど元來の標準たる君が意中の人は、すでに絶群の尤物たるを失はざるべく、また併せて君が胸中の煩悶を想ひ、早く此良縁を結ばんことを祈る、

◇第十七番

我は天下第一の醜女を得て妻にせんと思ふなり、しかも其醜を補ふに足るべき才學も技藝も願はず、また世に優れて系統の高きも擇ばず萬戸に稀なる財寶の多きも乞はず、唯うまれて不具ならぬ女の心さへ人並ならんには、餘所の目に見苦しからんほど我目には好ましく、たとひ色黒く髪ぢぢれて額は高く鼻は低く眼くほみて唇尖るとも、よしや手足長うて首筋短く胸元つき出でて腰骨張ればとて、雀海中に入

つて蛤となり田鼠化して鶉となるの理を思へば、あはれ斯くても女は女いつしか人の妻となつて子を孕む時もあるかと、世に怪しまれ人に疑はれ、あるに甲斐なく身の置所さへなきほどの醜女を娶りたし、さればとて我は物の美と云ふことを嫌ふにあらねど、絶世の佳人が張り詰めし才氣の目元いきくと諸事に行渡りて満座を驚かささんよりは、あはれなる醜女が身のほどを恥ぢて薄闇き物影に謹みつゝ、何事も人の問ふまで靜に差控へたる風情こそ却つて馨しく慕はしけれ、また思へば美といふも醜といふも僅に十年の間、やがて花落ち葉は散りて枯木の冬に何の色を残すべき、かつ傾國の姿は多く毒を含めど無鹽君の涙に人の溺るゝ罪はなく、美人その美を知つて世を我まゝに時めくと、醜女その醜を知つて萬人に捨てられたると、いづれか物の哀れぞ深き、いづれか心の色ぞ深き、されど世の人は心よりも形を思ひ情よりも色を好むがため、必ず彼を愛し彼を擇べど、我は之を愛し之を擇ぶ、もし

その美を好むに道理ありとせば、醜を好むもまた道理ありとせん、誰やらが句に、ものずきの蟲は来て啼け蓼の花、あゝ我々櫻に棲んで人に憎まれ身の危からんより蓼に棲んで世を安く心の静ならんこそ希望なれ、ましてや世にあるかぎりの男子いづれも皆あらそうて美を好み艶を競ふ中に、我々獨り天下第一の醜を得て意氣揚揚たるの奇觀また快とするに足るのみか、玉殿瓊樓の中央に小田の蛙の啼き損ねたらんが如き妻を据ゑ、いづる時は手を取つて驚に似たる姿を肥馬輕車に乗せ、形骸の美を抱いて喜ぶ浮世萬人の奴に腸破るゝばかりの一驚に喫せしめんと思ふなりあはせて古來幾多の色に脆き英雄の屍を冷笑ふも、また我々に取つての一興、美人十年の膝枕に睡るよりも遙に勝れり、

浪六これを評していふ、

むかし毛利の一族某は殊更に醜女を擇んで娶り、その他の名士また不具廢疾の妻

を持ちしもの多けれども、これ或は戦國のならひ言ふべからざる仔細ありての事ならんを、太平の今の世に我から進んで天下第一の醜を望み、しかも日夜奔走して得んとする君が如きは、好事の癖そもく稀なるべし、されど君が美を避けて醜を擇ぶの意は、佳人の揚れるを押へ醜婦の沈めるを痛み、ふかく形骸の花を賤しんで其色を憎み、こゝに心情の實を愛して其根を憫れむといふ、以て君が資性の義俠に富めるを仰ぐべく、また世上萬人に捨てられたるを我ひとり拾うて錦繡に包み、さらに手を携へて往來織るが如き大道を潤歩せんとするに至つては、うたゝ勃々たる君が平生の氣概を知るに足るべし、たゞ疑ふは事の實踐に於てのみ、偏に恐るゝは龍頭蛇尾の恨事のみ、わけて未だ相遇はざる男女の希望は風雨雷霆の變に等しと聞く、他日もし君が言行一致の勇を拜せば、浪六たゞちに趨つて今日の疑念を謝すべく、幾萬の醜婦また傲を四方に傳へて君がために萬歳を唱ふべし、

さても人の心は其面の如く、さまざまの希望、いろくの述懐、函の中に投げ入れし十七枚の文こゝに盡きて、席に集ひし十七人の男たがひに顔を見合はせ、どツと思はず笑ひ興じつゝ、雨夜の品定めとは昔より聞く言葉なれど、まこと眼前に打解けて斯くまでの興は再び得難く、かゝらん面白さは又とあるまじきに、このまゝ此文を反故として搔い捨てんこと儲も口惜しき業なり、されば他日の記念に取集めて遺しおき、おのゝいかならん妻にても持ちし曉に、また打寄りて昔語りの一個とせん、今こそ斯くて血氣さかんに猛く勇めど、やがては我も人も鬢に霜降り額に老の年波よりて、淺ましや孫の手に杖持ち添へつゝ、扶けられん果には、なほさらに今日の事ぞ懐しく床しからんと、一座しめりて何とやらん世の中の哀れを覺ゆる折しも、ばたくと楚音して此席に入り來りし八人は、これも平生の隔意なき友垣、今宵の遊興を漏れ聞きて俄に走せ來りし徒輩なりけり、おのゝ其懷中より一葉の文を投げ出して笑を含み、願は

くは我等が未來の妻も評にあづかりたしといふ、さらばとて沈みし坐興さつと再び湧き返り、前後あはせて二十五人ざんざめく中に、十七番うちつゞけて聲を潤らせし朗讀者と、たえまなき批判に勞れ果てたる浪六の二人、またもや坐の中央に引き出されぬ、

◇第十八番

かく申す拙者の希望は、やんごとなき館の中に育ち給うて鄙びたる浮世の事さらに知ろし召さぬ高貴の姫君へ、雲の掛橋、霞に千鳥、よしや及ぶとも願はず、かつまた一世の政事にあづかりて廟堂の時めく官人の令嬢、これを高峰の花と見て折り得るとも願はず、されば巨萬の富を積んで金色の光かやく豪賈の秘藏にもあらず、二つの眼は古今に照らして一代の指南車と仰がるゝ學者の娘にもあらず、さては三軍を叱咤する猛將勇士、六合を伸縮する高見博識、一國の經濟を動かす事業家、鬼神を指頭に宿す美術家、死骸を蘇すべき名醫、萬石を厨に潰す大農、其他すべて世にあら

ゆる名聞の門戸高き家の女は更なり、裂帛一聲かの江州の司馬をして泣かしむる名妓も好まず、色藝情致ならび得て教坊を傾くる絶群の娼婦にもあらず、たゞ願ふところは都に遠き片山里の月を燈火に砧うつ賤女か、あるはまた磯うつ浪の音にて小夜の千鳥を聞き馴れたる蟹が宮屋の少女を、そのまゝの姿に見て宿の妻に迎へたし、浪六これを評していふ、

そもく斯く申す拙者の希望はと、あまりに事々しう大業に出られたるのみか、上はやんごとなき館の姫君よりは下は賤しき花思の遊女に至るまで、いちく連ねて物のみごとに跳ね付けられし猛勢、さては怖ろしや、いかなるむづかしの御意ならんかと思ひの外、たゞ月夜に砧うつ女と浦に汐くむ蟹なりとは、あはれ何たる呆氣なき御言葉ぞや、浪六これに對して兎角の批判せんよりは、かつて浪六が著したる小説中の一文を抜いて、聊か君がために獨寐の夢を覺すべし、さてその文にいふ「汐

くむ海女に美人多く草刈る少女の懐しきは、和歌に讀み畫に寫してこそ雅趣もあれ、まことは恥づかしきところまで天日に晒して、青洩たれつ赤毛かぶりつ、色まツくろくろの肥ツてふ、片言まじりの大聲に喚いて猿の如く四方に駈け廻る姿、なんとして二目と見らるべき、動けば汗臭く寄れば日向臭く、これはくくと色道墮落の餓鬼さへ踵を蹴して逃ぐるは定なるに、おもへば須磨の昔に濡れたる行平どのは希代の好事、かくいへばとて賤女に美人なしといふにはあらず、たゞ君が畫空事に可憎生涯の希望をかけて、浮世の質風流に魂うごかさるゝを悼むのみ、よしや汐くむ蟹に傾國の姿を備へ草刈る女に絶世の色を添ふるとも、たえて世上の配合にうつらず人事の作用も無き無精非情の美は果して女といふものゝ美に叶ふや否や、されど浦ふく汐風に晒され叢の宿に育ちたるを磨かぬ玉の粹と見て、生れしまゝの働きも無き心を天真爛漫とするの意ならば、君もまた一種の哲理めいたる人として尊ばるるのみ、

◇第十九番

春情つく女の十七六は、木葉の散るにも呵しく箸の作るにも笑ふといへど、こは其心の底より呵しく笑ふにはあらで、たゞ一筋に我身の品を作らんがため、あるは餘所目に際立ちて見らるゝ恥づかしさを、色にかくし坐を綾どるの業なれば、態とめいたる斯る節を好まねど、我は生れながらに何となく呵しき女を妻に持ちたし、顔容は人に勝れて清く美はしく晴れたる中に、眉毛のあたり目元の端、さては起居動止、手足の運びに至るまで、おのづから懐しう愛らしき幼氣を含みて、道ゆく他人さへ思はず振り返りつゝ笑まるゝばかりの女、しかも物いふ言葉の端には罪も無き滑稽を帯びて、うきめ涙の席上も、いつしか忘るゝほどの可笑味、これも其身の氣づかぬ心より湧き出でて、賤しからぬうちに洒落たる風情を湛へ、見苦しからぬうちに馴々しき氣を持ちて、いはゞ寢よけに見ゆる若草の姿に思ひの外なる老木の節あ

りと見れば、またむづかしき式作法を易く輕けに流して不知顔の色おもしろう、はれの衣裳を着飾りても浮世萬人に外れし一癖をかしく、萬事に行渡りても何處やらに物足らぬ一振をかしう、さればとて何事も聲はりあけて笑ふことなく、我から轉びて人に笑はるゝことなく、をりくゝ物をあやまり事を過ちても、その過誤に憎氣もなければ尤むべき節もなく、たとひ己が才氣をいだきて叶はぬ時だにも、おほろけに遠く取廻して近く角々しき色を銜はず、もしや憤怒怨恨に堪へざる時など、いはゞ斯女が自然にうけたる一代の美と愛とをあらはして、娥眉を斂め丹花の脣を尖らし、雪の額に前髪ふりかけて腹立たしさの手足を打固めつゝ、無邪氣に拗ねて藻掻いて何事か獨り喃く風情、筆にも畫にも寫されざるのみか、また嬉し樂しげに打興する時などは、身の正體を崩さねど心の紐を解き弛めて、あまりの喜悅に我を忘るゝ氣色は何に譬へん、まして其品格よりいへば、世には磨ぎ澄ました

る明鏡に對ふが如き心地して見るべき美人もあれど、これは稍出來損ねたる黄金佛に薄絹を掛けたらんが如き風趣ありて、勿體なきうちには呵しき御姿を現じ、信心膽に銘ぜずとも元來下司の手には觸れまじき寶物なりけり、

浪六これを評していふ、

男としては圓轉滑脱の名士、女としては逆る色に呵しみを帯びたる才女、かれは一世の風浪を巧みに漕いで物に煩はされず、これは一身の艶を優しう展べて世に落ちず人に悪まれぬ尤物、天下の廣き女の数の多き、いづれあるべきも俄に求めて迎へんは難き業なるべし、もし斯る女ありとするも、妻として劣らぬほどの良人また稀なるべし、かつ一步これを誤れば輕薄伶俐の美人、二步これを誤れば心に常なき蓮葉女、三步これを誤れば飽くまで腹黒き女、四步これを誤れば追從諂諛の性、五步これを誤れば身持放埒の淫奔女となつて、いはゆる似て非なるの悔を遺さん、され

どまた其性を誤らずして、實に得るの幸福を得ば、良人たるものゝ生涯に月も花もなかるべく、思ふに本歌めくよりは總て俳諧めいたる女のことなるべし、

◇第二十番

遊女とて母の胎内より八文字踏んで生れ出でし凡例なく、夜毎に變る枕の數を並べて育ちしものなく、淀む濁りの水上も流れは清き石清水、神かけてななくの誓文はじめは親のため同胞のため、さては浮世の不運に攻められ善からぬ他人の口車に乗せられ、辛や悲しや遁れぬ涙の淵瀬、まことに落つべき仔細ありて落ちし身の末なれば、男の腕に清く洗うて見る目に蟲の影もなく獸の姿もうつらず、まして朝に送り夕に迎へて擇ば、心のまゝなる千萬人中より、たゞ斯人ひとりと身も骨も投げて憂目さんぐの果に添ひし良夫には、おのづから人しれぬ情も深く尋常の世上に得られぬ貞操もありて、いはゞ室に養はれ鉢に培はれたる花の姿たゞしう美しけれ

ど、雨露霜雪にうたれし辛苦の松の色いつか褪むべき、かつまた其あはれを思ふに世の女の百千倍いくその悲歎に我から女一期を捨て、沈めども、ながれの憂川竹に孝を唄はる、筈なく色を勤めの遊女に生涯無垢の道もなければ、名も得しらぬ無縁の他人が手にかゝりて悲しき春を弄ばれ、野末の小屋の醜女が口の端にも畜生がましく呼ばれ、鬼はいづこの里にも住むべきを唯こればかり魔界といはれて返さん言葉もなく、血の涙に染めし衣裳を着飾りて暮を夜明の萬燈に生恥さらし、黄金の端に身を買はれて心にもなき一夜の恩に指切髪捨身の苦惱を迫られ、片目には皮肉を絞る怨恨の露を滾せど片目には媚笑を浮べて娥眉をつくり、苦學十年おもてに飾る全盛の裏は猶更ら地獄の責苦、おもへば山海の珍味も錦繡の夜の具も小砂礫を嚙んで針の席に起き臥しすとや歎かん、まして遊女の戀は大の禁物、もしこれを犯せば忽ち其身の破滅、あるほどの客は一時に落ち来るほどの人は皆敵となつて影さへ

寄らぬ淋しさを、さらぬも鐵鎖で繋ぐ内證の無慈悲と遣手が怖ろしの邪慳に打たれ、雨と降る矢玉の呵責に身を切らる、責折檻の其中より、碎けて脆き情の露、おちて迷ふ傾城の戀、そもや我から解けて眞實しんから添ふ氣の情郎には、残る蟲の息を中有に吊られて取らる、までも、いと可愛と狂うて叫ぶ一念の風情、勇士の千軍萬馬を斬り抜けて運ぶ忠義に似たらんか、されば情郎の身には浮世千人の戀よりも腸に染んで哀れ深く、編笠紙衣の末も物かは、同じ酒色の巷に業を晒すからは、すかれて亡ぶ破れかぶれ、傘の骨となつてこそ面白けれど、此方も昇れば彼方も昇りて、のほりつめたる頂上は今昔ともに免れぬ遊里の憂節、互の胸は一所に通へど二人の姿は引き分けられ、せかれて募る其果は何となるべき、こゝに一重の垣を破れば沈む心中、死しての後の小唄にうたはれ、淨瑠璃芝居に乗るが手柄の果敢なき習慣、さても斯らん落魄の底より浮び生死の瀬戸より這ひ出でて、憂身やつせし昔の

戀を今の寢物語に笑ふ夫婦の快樂いかならん、我はこれを羨むにあらねど、太平無
 事の主従よりは戦國の君臣こそ契りも深く情も固しと思ふなれ、
 浪六これを諭していふ、

あゝ迷はれたるかな、夢にも見まじきものは遊里の戀なり、あゝ迷はれたるかな、
 かりにも逢ふまじきものは遊女の情なり、さても君がいふところは唯それ哀れのみ
 を汲んで皮肉に宿る毒を思はず、たゞこれ淺ましき色情の名聞、溺れて怖ろしき生
 涯の破滅を悟らず、親兄弟に見放され無縁の他人の傾城に可愛がるゝ身の果とい
 ふ、そもやこの小唄に喰はれて可憐ら男の立つ瀬もなく、見渡す世上に無垢の女も
 多きに何が不足に家庫つぶしての妻女と笑はれ、廣き天地に五尺の身一個を置き兼
 ぬるもの古來いくばくぞや、朱を奪ふ柴の色に身を染めては素の地肌に戻らんこと
 難く、雅樂を亂す鄭聲の音調に耳聾ひては再び人間の聲を聞かんこと難く、そもや

十五の曉より立つべき三十を我からし、惑はざる四十いよく迷うて五十の坂に
 天命を知るも及ばず、六十の終焉に薦を被つて受けたる悪疾を青天の下に晒し、死に
 損ねたる老の成る果を路頭に引き摺りて雨露霜雪に打たるゝもの古來また幾何ぞ
 や、たま〜昔の高尾、薄雲、瀬川、夕霧、今の世とて傾城の眞實なきにあらねど、そ
 の眞實を盡し盡されて互に何となる、すぎし憂身の苦勞を後の寢物語にすればとて
 千兩の角屋敷を一夜に潰して編笠紙衣の末を何とする、のこるほ悔の涙と千束の文
 殻、空しく紙屑籠に投げ入れて鼠の溺に汚されんのみ、かつはまた千金の客を振り
 揚つて一人落魄の男に迷ふを遊女の俠と稱へ、玉の輿に乗るが嫌さの苦勞を遊里の
 哀れといへど、心一個の身を萬人一様に待遇して虚偽を眞實といふが勤めの習慣、
 いはずば立たぬ賣色傾城に我ひとり色に通はせ情の血を吸ふは、男冥利に叶はぬの
 みか餘所の廂を盗んで己が營業するにも似たりけり、よしや斯らん憂身しのいで落

目の果に添はずとも、およそ遊女を妻に持つ身の涙しらすや、しばしは思ひし花を
 庭にうつして楽しく笑へど、やがて色褪め血氣をさまれば、さしもの名花いつしか
 嚙昔に變る今日の佛、我は固より我身の錆ながら閉さぬ世上の耳目を何とせん、用
 意一點の過誤によつて晴れの席上にも肩身うすく、覺悟一重の取捨によつて歩めば
 影をさゝるゝ指人形、たとひ諸道に長けて浮世萬人の女に勝るとも、身の清きを思
 へば味増漉さけて竈の下に煤けたる下婢一人に及ばず、いかに貞操を守りて行末な
 がく慎むとも、さがなき口の端に元の傾城いつまで唄はれて、生涯片輪の戀に伴ふ
 もの亦いくばくぞや、おもへば何事も過ぎし情の夢と消え果てゝ、さんぐ思ひ思
 はれし涙の跡もなく、好いたといふも若木の花の一盛り、老いての後は互に血道を
 あけし昔の白癡を笑うて、あゝ曲もないと今更の後悔なンの甲斐がある、されど斯
 ほどの後悔まだしも物の上乗、いづれ浮き沈みは遁れぬ人間界に、もしや運傾いて

連れ添ふ道も絶え、あきも飽かれもせぬ中を別るゝとも、あれ見よ、あれが小判を
 擱んで抛けた最後の御手柄、だますが色の傾城にして遣られし態と、物の諸分をし
 らぬ野暮めが口、されどこの野暮めが世の常なれば、捕へて口説いた曉は猶更ら血
 迷うた末と笑はれ、果は我から我を突き落して浮ぶ瀬もなきもの世間また幾何ぞや、
 むかし半掃庵の翁が遊里に通ふ男の様を見ていふ「都のおそるべき所々に、遊里の
 軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ、物よみ謠のつれにさゝやかされ、
 東は朝日の陰なる遊びも募れば西に傾き易く、もらひの無かりし夜は面白く、口説
 にあけし曉は叫しく、うそは誠にかくれ恨は情に負けてより、人のいさめ世のそし
 りしも行過の古みに見下し、宿はお留守の夢のうき橋ほどなく絶えて、奢る者など
 久しからんや、秋風内證に吹きわたり、出口の柳みすほらしけに散り初むるころ
 より、丹波口の茶屋も見ぬ顔して身をかり、すまの浦ならずも後背に山の借金負と

なれば、今出川の家も質に流れて姉が小路の妹婿より、よすが求めて今ぞ落目の境に下り、わづか二三年の夢、惘然とさめて思へば千束の文は何のためになりけるぞや、昔の孔子も今の伯父坊も異見はこゝの事なるべし」さても魚類の数は多く、わけて鯛といふ調味の最上もあるに、鰻を食ふ人こそ傾城買に似たらんか、夢にも見まじきものは遊里の戀、かりにも逢ふまじきものは遊女の情

◇第二十一番

我は世の人の如く女といふものを敬愛するの心なければ、また妻といふものに重きを置くべき道理なく、唯これ男のために天より賜はりし一種の器具と見て、しかも衣食住の次に位するまでと思ふなり、故に娶りて子を生めば則ち子を生むの道具と思ひ、あはせて我血統こゝに絶えず家また亡びざるの幸とし、もし子を生まざれば單に情慾を慰むるの道具と思ひ、あはせて我は親と呼べる、を得ず子孫を遺す能は

ずと思ふのみ、その他は凡て左右の用を辨するがために迎へ、わけて老後の世話をさせんがために迎ふ、されば女の喜怒哀樂は我に於て更に痛痒を感じず、女の美醜賢愚また我に於て少しの好悪を存せず、ましてこれを選ぶに日を費し財を散じて選擇取捨の勞を取らんや、たゞ時の運に任して我手に落ち来るを拾ふの外は、平々淡淡として寸毫も關せざるなり、故に其妻もし一朝病んで死することありとも、これ殆ど器具の損じて不用となりしに等しく、もし我に反いて姦夫と共に走ることありとも、これ其器具の紛失せしと同じく、たゞ一時の不便を感じて己まんのみ、敢て怒らず恨まず責めず驚かず、また再び妻を迎へて其缺を補ひ、新陳代謝、むしろ古きを捨て、新らしきを喜ばん、されどこの器具は元來わが玩弄物にあらずして日夜缺くべからざる左右の必需品なれば、その損せざる限り失はざる限り、朝夕これを愛惜して傷つけざるのみか、またこれが修飾保存に怠らざるべし、何となれば我物品に供

する必須の財を惜しむは、おのれが身の攝生を忽せにする愚者に等しければなり、浪六これを評していふ、

男尊女卑の説を遠く越えて、いやくも女を敬愛するの念さらになしといふのみか、人事最大の妻を以て一種の器具とし、しかも成否變轉の易きこと履を脱ぐに等しき衣食住の下位とするに至っては、殆どこれ一個の木強漢、その死を以て器具の缺損となし、その姦通を以て器具の紛失となし、たゞ一時の不便を感じて冷然たるに至っては、いよく血もなく精もなき無情の形骸、たま〜人間に來つて男子の假面を盗むが如く、もし靈あらば其靈かならず鳥獸に似たるが如きも、さらに瞑目沈思して眞意のあるところを窺へば、その損せざるかぎり失はざるかぎり、朝夕これを愛惜して修飾保存を忽せにせざるのみか、これに供する必要の財を惜しむは己が攝生を怠るに等しといふ、以て聊か前言の非を補ふに足るべく、或は今日夫婦の間に起

る一種の通弊を看破して寧ろ此極端に走りしとも見るべきか、されど君は到底残酷薄の評を免れざるべし、願はくは早く才色雙絶の良妻を迎へて、この評を外ると共に君が持論を施し得ざる臆病の人となれ、食言の人となれ、

◇第二十一番

我は唯わが身一個を養ふ外に世の富貴利達を求めず、うたかたの水の泡に生涯を比べて、かたぶく有明の月影に心を寄せつゝ、衣は寒からざるをもて限りとし、食は飢ゑざるをもて足れりとし、家は雨露を凌ぎ風雨を防ぐばかりの宿に、葎は軒を這ひ渡りて蜘蛛の巢に門の戸を張らるゝとも、訪ひ來る人を待たず我また出でて車馬の巷に遊ぶを好まねば、何をか恥ぢて誰にか憚らん、さりとして迹を深山の雲にくらまし身を蓬生の蔭に隠すべき隠者ならず、味噌醬油の通路をあけて節期師走をも知る我なれば、こゝに妻といふものも欲しけれ、たゞその妻の我心に伴ひ我身に添ふ

ほどの女ならずば、いかなる美人も貞女も其甲斐なく、さながら客を扱ひ客に扱はるゝ心地やせん、これを思へば翠帳紅閨に育ちたる女、さては名門沙汰に耳傾くる女、世に羨まれ人に戀はるゝほどの女は、すべて我妻になり得まじ我また迎へがたく、唯いつまでも斯くて過ぎなんか、もしそれ畦の落穂を拾うて其日を渡る女、あは愚に物事しらぬ貧家の娘などこそ、我家にも來べく我にも添ふべけれど、さては我好むところにあらずと妻とせん心さらになし、

浪六これを評していふ、

これ殆ど朝市にかくれたる大隱の、なほ浮世に心残して色情を去り難きに似たり、もしそれならば古人のうちに誰をか君の先達とせん、或は大雅堂をや慕はれけん、玉瀾女史をや望まれけん、よし君に九霞山樵の脱俗ありとするも、今の世に祇園林の百合が子に似たる女やある、浪六こゝに君がためにいふ、町子の如き妻を得らる

るまでは、まづ十萬堂の來山を學んで、靜に伏見人形を朝夕の伽とせらるべし、

◇第二十三番

一、一季を二度として春夏秋冬四季に八度の外は我まゝ、勝手の物見遊山に出でまじき事、但し良人もしくは親子その他親族の長者に伴はれて、いづる時は此かぎりにあらず、

一、朝は六時までに起き出でて其身のまはり一切を整へ、夜は十一時まで必ず睡るまじき事、但し一家に已むを得ざる出來事、もしくは親良人の他出して歸宅せざる時は十一時を過ぎるも睡るべからず、

一、世間體に見苦しからぬまでの衣裳手道具に止めて諸事奢るまじき事、但し已むを得ざる儀式に出づる時、もしくは他よりの贈物は此かぎりにあらず、

一、たとひ差岡なきことにもせよ家事一切を明りに吹聴すまじき事、但し遁れがた

き人に問はれ言はで叶はぬことは此かぎりにあらず、

一、たとひ従前の深き友朋輩たりとも用もなき時に訪ひ訪はれまじき事、但し世上

一般の義理人情は此かぎりにあらず、

一、庖厨の諸事は其身みづから手を下さずとも必ず等閑にすまじき事、但し召使の

もの、働きぶりを奪ふべからず、

一、客來の席上には良人の指圖なきに出でまじき事、但し心易く差問なき時は此か

ぎりにあらず、

一、良人と我子と自分の衣類は凡て他人の裁縫にかけまじき事、但し覺悟なき業は

此かぎりにあらず、

一、他人の事には善惡とも一切口を容れまじき事、

一、我身の失策は決して隠すまじき事、

一、みだりに其身の技能才藝を振舞ふまじき事、

一、金錢の出納に越度あるまじき事、

一、たとひ如何なる事ありとも際立ちたる喜怒哀樂を人に見せまじき事、

一、身分不相應の恩義を人に施すまじき事、

まづ以上の條件に叶うて身體強壯に容貌見苦しからぬ婦女を迎へて妻に持たし、

年のころは十八より二十五までをもて限りとす、

浪六これを評していふ、

まことに穩當なる條件のいちく、これを備へて容貌見苦しからず身體強壯ならば何人の妻としても聊かの不足なき令閨なるべし、まづ斯る女をや世間普通の妻女が標準とすべきか、

◇第二十四番

男女相愛するは争ふべからざる自然の理にて、その愛なるもの竟に合して一室のうち
 ちに和し、こゝに借老同穴の契りを人間の本分とすれども、我は聊か故ありて夫婦の
 同居を好まず、願はくは財産學力品位その他すべて世に獨立し得べき女子と、生涯
 の契約を設けて家を別にし生活を異にし、たゞ長く其間に情交親密の衰へざらんこ
 とを祈るのみ、さればとて我は世にいふ伉儷の樂しみを捨て異體同心の情を割き、
 また百年の苦樂に伴うて相扶け相寄る夫妻の美を嫌ふものにあらず、偏に恐るゝは
 人智次第に迫つて理は情を奪ひ社會ますます窮して狹隘苛酷となれる今日の勢ひ、
 徒らに男を良人と名づけ女を妻と名づけて終生圓滿の快樂を遂げ得べきや否や、そ
 もく、良人なる名稱の下には男子こゝに其資性を枉けて妻のために本領の幾分を殺
 がざるべからず、妻なる名稱の下には女子また其身と其心の幾分を犠牲に供して良
 人のために天賦の自由を缺かざるべからず、かつ思ふに良人といへば妻の犯せし罪

を遁るゝ能はず、妻といへば良人の非を避くる能はず、互に性來の一端を捨て、終
 身を夫婦なる名聞の綱に縛し、甚だしきは男子その面目を失ふの悲慘に逢ふも良人
 と呼ばるゝがために自ら忍んで暗涙に泣き、女子また妻と呼ばるゝがために富貴の
 生涯を婢僕とし靈妙の五體を翫弄の器具とし、竟に古來の詩人をして人生婦人の身
 となる勿れ百年の苦樂他人に依るの歎あらしむるに至る、されば夫婦なる文字を外
 面より見れば人間無上の光榮と快樂とを示せど、奈何せん世上の實際その裏面より
 見れば多く失望を孕み苦惱を包み涙を含み、唯その失望の歎と苦惱の涙を呑んで發
 せざるものは夫婦和合し、一朝もし發して相互の堪忍に均一を缺けば忽ち波瀾を生
 じて閨門の醜聲外に漏るゝのみか、竟に別離の慘を呈し反目敵視の奇に終る、故に我
 は斯る危険を冒し斯る苦境を忍び猶かつ己が本領を殺いで空しく夫婦の名を求めん
 よりは、その虚儀虚飾を脱して長へに其情實を保たんとするなり、是に於てか女子

に我と等しき財産知識を要し、門戸生活また悉く異にして一見殆ど他人の如きも、日を定め時を期して一堂に相會し相親しみ、朝夕暮々の觀つければ春花秋月ほしいまゝに手を聯ねて外に出で、纏綿情緒の興に飽けば夏涼觀雪ともに相誘うて遠く遊び、かの紛々たる俗世の煩勞を去つて唯單に神聖なる戀の一事あるのみ、かつ情は始めに厚くして後に薄きの恐れあれば、朝に別れて夕に逢ふもの常に戀の新なるを喜んで潤るゝの憂ひなく、また互に家事の系累なければ男女ともに肅然として却つて禮を亂し性を損ふの憂ひも無かるべし、もしそれ契約に反いて情を破るの不徳あらば、すでに破るもの再び返すべからざるが故に、其財産を歿收して罪を償はしめ、もしそれ子を生むの慶事あらば、おのゝ等分の資力を合し別に完全なる父母を擇び、やゝ長ずれば凡て之を學校の教育に委するのみ、何を苦しんでか殊更に互の天賦を殺いで夫婦虚名の犠牲とならん、何を苦しんでか徒らに名聞の奴隸となつて生

涯の苦境を求めん、骨肉同胞と雖も久しく室を同じうせば相和するもの稀なるに、異性の男女こゝに合して身を終るまで間斷なき世上の風波を渡らんとす、理に於て固より圓滿を望むべからざるなり、故に我は斷乎として夫婦の虚名を求めず男女同居の弊を取らず、誓つて斯説を實行せんとするもの、何ぞまた美醜を選ぶの違あらん、浪六これを評していふ、

文章いまだ意を達せずと雖も、矯々たる一場の議論、諤々たる一篇の奇説、人をしめて殆ど其間に是非を分別するの違あらざらしむ、されど浪六おもふに、恐らくは君もまた角を矯めて牛を殺すの人ならんか、その名の美にして其實の美ならざるもの何ぞ殊更に夫婦を責めん、人寰すべて苦樂の境、一眼を閉ぢて物の半面を望めば宇宙の萬象いづれか涙なからん、もし君が説に一步を譲りて、夫婦の虚名に互の性を殺ぐべからざるがため、人間の情事をあけて一種の契約に託するも、すでに契約と

いふ二字、これまた幾分か相互の天賦を枉げずんば決して成立するものにあらざるなり、君乞ふ、人生獨居の説を誤る勿れ、また天理自由の説を過る勿れ、一國の法律は一面に民の權利自由を守れども一面は却つて民の權利自由を禁壓するがために起るもの、社會全體の安寧秩序を保つがために幾萬の人種おのゝ自由の一端を犠牲に供して成るの契約これを法律といふ、たゞ人を害せざるかぎりの範圍に於て其自由を許し其權利を守るのみ、されば君がいゆる男女の契約また然り、或は夫婦の名より生ずる煩勞を防ぐに足れども、男女こゝに別居して生活を異にするがため其男女に終生に涙なるものを去り得べきや否や、浪六の如きは寧ろ互に相依り相伴うて涙あるに如かざるなり、かつ君が説くところを以て一場の學理とするは可なり、もし直ちに用ひて今日の世上に當らんとすれば、竟に社會の破綻を醸して人倫の大義これより亡ぶに至らんか、かの門戶生活を別にして單に戀の一事を喜び、朝夕相往

來して其清く新なるを樂しむは春色情致の厚き時に然らも、もし互に色衰へ情去りて白髮枯凋の後に果して能く其戀を存し得べきや否や、昔日の歡樂一場の夢と化して老後ともに之を行ふ能はざるに至らば、かつて神聖と仰ける完全の契約書は一片の反故のみ、男女また冷然として殆ど道路の人のみ、其間に生じたる子の如きは恰も野合の遺子、生れて父母なく長じて家庭なく、たゞ金錢の力に依つて僅に人となるの悲惨を呈し、朋友親族また之より絶えて竟に社會は寂寞たる枯骨の野とならん、もしそれ夫婦は人間一種の嬉戲に屬して親は子を教育するの義務なく子は親に孝を盡すの約束なしといはゞ、浪六また何をかいはん、たゞ近年の白面書生みだりて熱血の人事を取つて數學の模型に投ぜんとするを悲しむのみ、

◇第二十五番

拙者は何事も放任主義なれど、さて生涯の妻定めとなれば少々こゝに考へどころ、

それも此席の諸君の如き大業なる注文はなし、たゞ拙者が三十歳となれる曉、隔意なき朋友あるは多年の知己を腹心とたのみ、拙者いちく鑑定本人となつて四方に駈け廻り、これに供する運動費は凡そ五百圓、これに費す時日は凡そ半歳、女も來べく拙者も迎ふべきほどの處女三十人を選び、その姓名を紙片に書き付けて鬮取に抜かんと思ふなり、善玉を得れば幸福、悪玉を擲めば不幸、添うた上からは夫婦の間あひだに起る涙なみだで人も恨うらまず世をも恨うらまず、鬼おにも佛ほとけも唯わが身みの運うんと諦あきらめんのみ、

浪六これを評ひやうしていふ、

天晴あつはれたしかに二十五番の殿ほんしんがりと見受みうけたり、かつ添そうた上うへからは夫婦ふうふの愚癡ぐちを門外もんぐわいに滾こぼさじといふところ正まさに千鈞せんきんの力ちから、偏ひとへに君きみが心こころを仰あふいで君きみが令閨れいけいたる女ひとの幸さいはひを羨うらやむもの天下てんかに多おほかるべし、

しなさとだめ

錦祖きんそは外面げめん如菩薩にょぼつ内心しん如夜叉しやと説といて憎にくめども、其實そのじつは衆生しゆじやう濟度さいどの方ほう便べんも叶かなはぬ敵てきと怖おそれて舌したを卷まき、儒道じゆだうの先達せんたつは女子ぢよしと小人せうじんを養やしなひ難がたしと卑いやしめども、其實そのじつは仁義じんぎ五常じやうの盾たてにも防ふせげぬ力ちからに呆あきれて驚おどき、西洋せいやうの人は女をんなを愛あいの神かみと稱となへて尊敬そんけいしながら變かはる眼め球たまの髻ひげ面づらを回めぐせば、薔薇ばらに一種しゆの魔力まじやくありといひ女をんなは秘密ひみつの鍵かぎとして意こころの用心ようじんさらに怠おこたり情じやうなし、

されば古今ここん東西とうざいいづれの歴史れきしを繙ひもといても、修羅しゆらの巷ちまたに血河屍山けつがしざんを築きづく表おもての裏うらには、いろどる几帳きやうの影かげに蟲むしも殺ころさぬ花はなの上じやうらましくて、近くは徳川氏とくがわし江戸えど三百年さんねんの大仕掛おほじかけも、雲くもを突き抜ぬく毛鎗けやうの穂先ほさきと闇やみにも輝かがやく金紋きんもん先箱さきばことのみ思おもひの外ほか、あやつる糸いとは人ひと知れぬ千代田ちよだの城しろの大奥おほおくに潜ひそんで、もゆる丹花たんくわの脣端くちもとべちや／＼と吐ぬかした力ちからが多いと

やら、これを人にしては悪七兵衛景清も五條阪にうかれて豫讓の出来損ひとなり、曾
 我の若殿原も大磯小磯の夕まぐれに十八年の天津風まんと三年を遣り後れ、つひに
 泣かぬ辯慶が泣いたも元は戀ゆるにて、御曹子牛若丸の昔より積んだ手柄の粉となつ
 て腰越狀に腰抜けしも、義經とやら宜きに計らへと仰せられし建禮門院が八島の船中
 の首尾からとやら、あな怖ろし、さても怖ろしき此もの、害毒は鐵で鍊へし鎧の實も
 何のその、旭將軍義仲どの、首ツ玉にかぢりついて江州粟津の里に寒帷子の墓さむ
 く、左中將義貞ぬしの膝を捻つて建武中興の政道を毀しぬ、さては源氏の後家どの豊
 臣の後家どの、いづれも前の空屋から火を出して母屋の雨戸一枚残さぬ丸焼に、その
 火の粉は後世凡夫の家にまで飛び散つて、火の車ひく大牛のツそりと白壁の割目より
 這ひ出せば、千兩の家臺骨腐つて一夜に仆れ萬金の大廈高樓、忽ち蟲の啼く音の野原と
 なる、乃至また時に拔山蓋世の英雄をして女兒に泣くの歎あらしめ、文珠普賢の智徳

にも臍を舐つて後悔の涙あらしめ、古來いくばくの可憐ら男が世を振り棄て、山に入
 り水に漂ふ無分別も七分は彼奴が爲す業にて、雲に乗る仙人も忘れがたき故郷の煩惱
 に通を失うては下界に顛がり落ちぬ、なんぞ女の髪もて大象を繋ぐの力に驚かん、な
 んぞ今更ら履ける駒下駄の音からころに浮世の鹿の寄るを怪しまん、
 天下には國家紛亂の原因、大名には御家騒動の種子、古來みたりに怖れて傾城傾國の
 文字を與へしより、街道筋の飯盛おじやれも陣屋ぐらるを傾けんと欲し、一家に取ッ
 ては大黒柱の根を掘る鋤鎌、一人の身には生命を削る斧となり鉋となり、眼前ちよん
 の間に悪戯にも毛脛男の血を絞る骨を抜いて正氣を喪はしむ、さりとして彼女の陰險深
 酷なる、眞正面より駈け來つて青天白日の下に毒を注がず、夜更け人定まつて燈火の
 幽なる影、雨そほふりて人なき徒然の時、あるは月雪花の清き舞臺を藉りて己が姿を
 粧ひつ、泣くが如く笑ふが如く怨むが如く訴ふるが如く、拗ねるとやら曲るとやら、